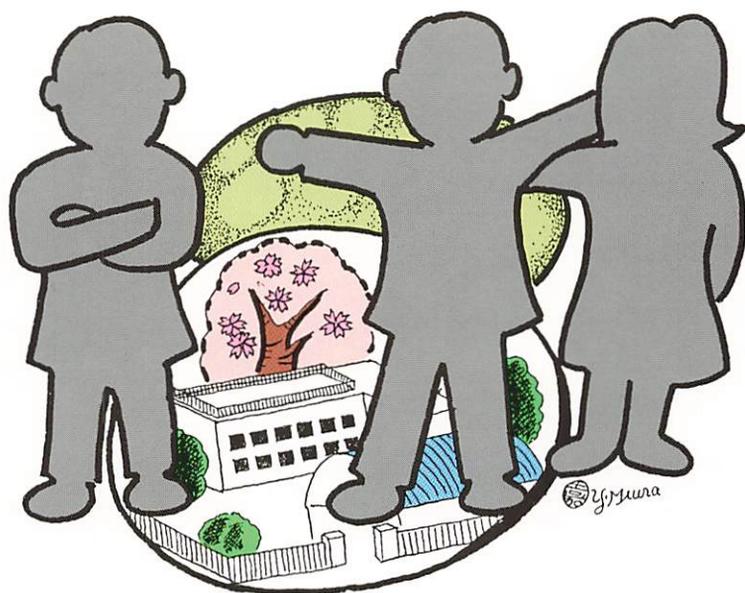


第五回 教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐる Part3

——進路と自立を拓く——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・後藤 真弓

(あさおの会・代表)

・坂木 啓一

(東京都港区立三光小学校教諭)

・武田 利邦

(神奈川県立保土ヶ谷高等学校教諭)

・永田 實

(県教育文化研究所・専任カウンセラー)

コーディネーター

・内山 淳

(県教育文化研究所・専任カウンセラー)

1994年2月19日(土)
於：エポックなかはら

開 会

○司会 それでは定刻になりましたので、神奈川県教育文化研究所の第五回教育シンポジウムを開催させていただきます。私は全体の司会を務めます事務局長の谷口と申します。よろしくお願ひします。では、最初に本日の主催者であります県教育文化研究所の倉持所長から皆さまにごあいさつをいたします。

県教文研所長あいさつ

○倉持巳佐男県教文研所長 皆様こんにちは。土曜日の午後、何かとご多用のところをこのシンポジウムにご参加をいただきまして、まことにありがとうございます。

神奈川県教育文化研究所というのは行政の機関ではございませんで、神奈川県教職員組合の先生方が拠金をしまして、そのお金で設立され、活動をしている機関でございます。一九八〇年の七月に創設をいたしまして、その翌年の七月から

教育相談を始めております。

私どもの方の教育相談は、手紙とか電話、あるいは最近では面談が多くなってきておりますが、中心は電話相談でございます。開始しましてから、九三年の三月までに受け付けました相談件数は三、五



五五件になっておりますが、その中で最も多いのが不登校問題でございます。特に八六年ごろから急カーブでこの不登校問題は増大をきてきております。

ここ数年、全国的にも不登校が増加の一途をたどっております、内容もいろいろ深刻化している問題が多いようでございますが、これについてはもう既に皆さんはご承知のことと思えます。

当研究所では、教育相談の一層の拡充を図る一方で、九二年から教育シンポジウムを始めました。その教育シンポジウムの中で不登校を第一のテーマとして実施をしてまいりました。不登校をテーマとするシンポジウムは今までに二回実施をきてきております。第一回は、九二年の二月に相模原で行いまして、そのときのテーマは「子どもの心を探りよりよい対応を考える」ということでございました。第二回は、九二年の十月に平塚で行いまして、「不登校をめぐる」パート2子どもたちの明日へのメッセージ」というテーマで開催をいたしました。不登校問題の第三回目が本日でございます。既にご案内のように、「不登校問題をめぐる」パート3進路と自立を拓く」というテーマでございます。前の二回のシンポジウムにおきましては、不登校をめぐるさまざまな問題、家庭での対応、学校の対応、子どもの居場所の問題など、たくさんの方の意見の発表、交流が活発に行われました。

この二回のシンポジウムに参加をしまして、私もいろいろなと感銘を受け、教えられたことがたくさんあるわけでございますが、その中で、不登校体験を持つて現在には福祉関係の仕事に携わっている青年の体験談、そのときの悩みを生々の声で直接聞いたこと。それから、不登校の子どもと二十数年つき合つてこられたシンポジストの先生の、子どもたちは「本音の言える関係」を強く求めているという具体的な事例を挙げてのお話などが印象に残っております。

子どもたちは、学校や家庭や社会の中で、さまざまな経験をして成長をしていきます。不登校もそうした貴重な経験としてとらえることができます。自立して、確かな人生を送る上での道程

として、この不登校は乗り越えなければならぬと思います。そのために親や教師がどう援助してやるかが問われていると思います。不登校の子どもが進路と自立を拓いていくためには、さまざまな困難が横たわっていると思います。それらの問題にどう対応していくのが最善なのか。

きょうは、限られた時間ではございますけれども、シンポジストの先生のお話を土台にしてご参会の皆様体験やご意見を活発に交流していただき、実りのあるシンポジウムになりますように切にお願いをするわけであります。

終わりに、きょうのこの催しにご後援をいただいております神奈川教育委員会、川崎市教育委員会、共催をいただいております川崎教育文化研究所に厚く感謝を申し上げます、あいさつにかえさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○司会 続きます、今のお話にもありましたけれども、今回のシンポジウム開催に当たりまして、共催ということで大変お骨折りをいただきました、川崎教育文化研究所の内田所長からあいさつをいただきます。

川崎教文研所長あいさつ



○内田信之川崎教文研所長 こんにちは。ただいま紹介のありました川崎教育文化研究所所長の内田でございます。

県の教文研の主催によります不登校をめぐるシンポジウムが、この川崎の地で開催されるとこにつきまして、川崎教文研として歓迎いたしたいと思っておりますのでございます。

さて、川崎の教育、特に不登校をめぐるの問題につきましては、県内全体の状況と同じように増加の傾向にあり、大きな課題であるという認識に立っております。この会場の隣りの高津区に川崎市総合教育センターがございます。そこで教育相談事業が行われておりまして、子どもたちをめぐるさまざまな相談を受けているわけでございますが、その事例を見ても、二年度の一年間で相談件数八五七件ございましたが、そのうち四四・二%の三七九件が不登校にかかわる相談であったということでございます。その前の一昨年度は三三七件ということで、九三年度の状況についてもセンターの担当の方とお話したところ、昨年度に引き続き、多くの相談があるというお話を伺っているとございます。

この不登校、なぜ不登校なのかなというところから、その原因と対応につきましては、学校の現場、また家庭、地域の皆さん方が非常に悩み、その対応についてご苦労されているわけでございますが、どう学校でその問題についての解決を図っていくのか。また、家庭で、地域ではということ、なかなか抜本的な解決策が見出せないのも現状であるというところを申し上げます。

私は、教文研ということとあわせて、教職員組合という立場にもあり、教育運動に携わる者としても、改めて学校は誰のためにあるのか。教育の主人公はあくまでも子どもであるわけでございますから、そのことを確認しつつ、わかる授業、楽しい学校づくりなどの取り組みが強く求められているという認識をしているわけでございます。

そういった観点に立ちまして、この不登校をめぐる問題についても、川崎の教文研と川教組が一体となつてさまざまな取り組みを進めております。私たち川教組の運動のこの不登校をめぐる取り組みの歴史を見ても、一九八〇年代の前半のころの対応をふりかえってみますと、校内暴力とか、あるいは非行、いわゆるそういったふうな教育荒廃をめぐる課題から、それをどう克服するかという観点で、不登校の問題についてもとらえてきたと思っております。

それが一九八〇年代の後半のころ、とりわけ「子どもの権利条約」が国連で採択されたころから、そういった視点をさらに一歩進めて、「子どもの人権」というものをキーワードに据えながら、改めてさまざまな教育をめぐる問題についてとらえ返してみようという動きになってきたように受けとめているところでございます。

このような動きの中で川教組といたしましては、不登校やその他教育上の諸問題を「子どもの人権」をめぐる問題としてとらえかえし、どのように解決するかということで、「子どもの人権を考える専門委員会」を設置して検討をすすめる、第一次の報告をまとめたところでございますが、その中に、学校の中で子どもが持つ固有の権利としてということ、次のようなことがあげられております。

- 一 番目として、学び、知り、生きる力を得る権利
- 二 番目として、遊び、体験し、ともに育ち生きる権利

三番目として、希望に生き、みずからを確立し、自立する権利

四番目として、生命、安全が守られ、健康を維持する権利

五番目として、伸び伸びと自由で、快適な生活をする権利

六番目として、正當に認められ、励まされ、元氣が出る権利

それらの権利が学校生活で保障されることで、子どもの人権はより確かなものとなるという前提に立って、そのための手だて、条件整備を含めた取り組みをしていくことをめざして、川教組といたしましては、本年度の運動の最重要点として、『子どもの人権』を大切にされた学校づくりを提起し、取り組みを進めてきたわけでございます。

そしてその一環として教育委員会の方にも強く働きかけをいたしまして、子ども教育相談センターの設置や、川崎にも不登校の子どもたちのための相談学級、適応教室の拡充、そして、子ども教育相談センターとのネットワーク化をはかるなど、そのような施策を提起いたしました。具体としてそのような方向で今固まりつつあります。

あわせて私たち教職員・学校のとりくみとして、みずからの教職員の意識変革を含めて、いかに子どもの人権を大切にされた学校づくりをすすめるのかということ、各職場に子どもの人権担当者の設置、できれば子どもの人権推進委員会のような組織をつくって、職場全体を挙げて取り組む運動として提起をしているところでございます。

そういう取り組みを通しながら、不登校の問題について一歩前進できるような手がかりをつかんでいきたいと考えております。

本日のシンポジウムもさまざまなご意見があらうかと思いますが、そのご意見というものをまた参考にさせていただきながら、川崎の地での取り組みを今後さらに進めていきたいと考えております。

最後に、せっかくの機会でございますので、川崎の教育文化研究所の紹介をちよつとさせていただきます。皆さんのお手元にチラシがあらうかと思うんですが、川崎教育文化研究所は県教育文化研究所の地域版というところな方をさせていただいて結構でございます。川崎教育文化研究所がとりくむ独自の活動としては、市民教育文化講演会、川崎子どもニュースの発行、夏休み親子映画会の開催、触れ合いサマーキャンプの後援、ホレロを楽しむ会の後援、出版事業などがあり、川崎の父母、地域住民、子どもたち、それから教職員の教育文化の向上に少しでも役立てればと願いつつ取り組みを進めているところでございます。このチラシそのものは教育文化講演会の案内でございます。できれば機会をつくっていただいて、そちらの方のご出席もお願いできればありがたいなと考えております。

そのことをお願いを申し上げつつ、あわせて、本日のこのシンポジウムが成功裏に展開することを祈念いたしまして、ごあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。（拍手）

○司会 どうもありがとうございます。

（会場に音楽が流れる）ふだん結婚式のパーティーなどによく使われていますので、そのような雰囲気音楽が何かのまちがいで今流れているのですけれども、申しわけありません。音楽は何といたしますので、始めさせていただきます。

これより先の司会進行はコーディネーターということで、本研究所の教育相談室の専任カウンセラーを務めております内山先生にお願いいたします。よろしく願います。

シンポジウム



○内山（コーディネーター）（会場に音楽が流れる）ミス川崎のコンテストかなんかがあるようですので、その関係で音楽が流れているのかと思いますが、時間が大分過ぎておりますので、早速、本題のシンポジウムの方に入っていきます。と思います。

私は、県教育文化研究所の設立時に、中学の教師をしておりましたが、五年ばかり教育相談委員ということで現場からかわっておりました関係で、退職いたしました。内山と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、お手元に次第のプリントがいつているかと思いますが、不登校をめぐる進路と自立を拓くということで、早速シンポジウムに入ってまいりたいと思います。

本日のシンポジストは、向かって右の方からこのプリントに書いてございます順にお座りいただいております。本日の発言順もこの順にさせていただきます。と思っております。

それでは、第一回目は、各シンポジストの方から、それぞれの立場での意見を発表していただくことから始めたいと思います。まず永田實先生は、私どもと一緒に教育文化研究所で、現在専任カウンセラーとして教育相談に当たっておられますが、かつては横浜市の中学校の教員として二十数年にわたって不登校問題にかかわってこられた先生でございます。そこからはまずお話をいただいて、次々にお話を伺おうと思えます。

では、永田先生、よろしく願います。



○永田（県教文研専任カウンセラー）（依然として、発信源不明のBGM風音楽がかなり高音量で流れている）音楽が流れていて聞く方も、話す方も、進行上やりにくいのですが、係の方で調整中なので、気持ちが集中しにくいかと思いますが、やむえまませんので、話を始めます。

私は、横浜の中学校の教員をやっております、今、振り返りますと、不登校と考えられている子どもと私が最初に出会ったのが、記憶をたどりますと一九六一年、もう三十何年前だったと思います。そのころはそういう子どもというものは何も知らずに、担任として受け持っていました。

そういう話をしていると、切りがないんですけれども、今は不登校の問題が大変今目立ってきておりますが、実は、コーディネーターをやっている内山先生などと私は一緒に一九六六年ごろ、全県下に専任カウンセラーという制度が設けられて、学校の教員なんですけれども、学校を巡回して回って、その学校の先生たちのお手伝いをし、特に子どもたちのことについて支えていこうという活動をいたしました。その活動を始めてみると、当時既に学校に行っていないで、あえて言うならば、そのまま置き去りにされている子どもたちが横浜でもかなりおりました。当時の横浜市教育研究所の調査でも、○・五％という数が報告されています。そういういきさつから、その子どもたちに対して内山先生や私もそれぞれ家庭訪問をしたりして、子どもたちに会っていくようなことをしておりますうちに、一緒に出かけてみようかという働きかけに、子どもが誘いに乗って私たちのオフィス（横浜市の青少年相談センターというところにごさいました）へ遊びに訪ねてくる。あの子どももこの子どもというので、来た部屋のみで、マンガや本を読んだり、自由に動きまわったりして、同じように来ている子と話をし

たりしながら、自分から「またここに来ていい？」と求めたりして、遊び気分が集まってくるようになりました。それならグループでの対応もしていこうと、自然発生的に、今でいう「居場所」が、公的機関の中に、三十年近く前にできました。その他にも、家庭訪問だけを一年も二年も続けたり、家族の方だけに会ったりする活動なども重ねてきました。

そういう体験を通してみますと、私も今数えてみてわからないんですが、恐らく何百人という子たちに今まで触れてきたのかなと思うんです。その一人一人のことを思い起こしていけば限りがないんですが、私の初期のころにつき合った子なんかは、大変な社会経験を積んできているわけです。今でも頑張ってくれている当時のお嬢さん、今はしっかりした肝っ玉母さんみたいなお母さんになっていきますけども、この方が不登校になったのは川崎に住んでいて、横浜に移ってきたら不登校になっちゃったんですね。これは横浜という土地がいけないとか、横浜という学校がいけないとか、単純なことではないのですが、家庭は変わらないんですから、どうもよくそこはわからないんですけども、一時は随分落ち込んでいましたけども、もともと大変エネルギーなお嬢さんでしたので、今でもその子がリーダーシップをとって、当時の不登校であった仲間を声をかけて、毎年のようにクラス会を開くということで、その前後の人がよく集まって昔話にふけったり、近況を語り合ったりしております。その人たちから「うちの子は小学校に行つて、このごろ学校を渡るんだけど、大丈夫かしら」という話が出て、「大丈夫、大丈夫、そんなことは気にしていなきゃ」なんて言つて、翌年会つたときには、「今、ケロッツと行っています」なんていう話題も出たりするようなことがありました。

そのころはどういう時代であつたかという点、七〇年代の問題と云つて、大学を中心にして学園のいろんな問題があつたときです。その余波として浅間山荘事件のころに、学級で何をしていたかといつたら、あの日はずっとその子たちと一緒に一日テレビを見ていたなということがあつて、その後何

が起こったかといったら、先程の子がリーダーになって、「きょうはグループ活動があるけど、それはやりたくないから」というので、「やっちなまえ」とか言って、教室にあった机全部でバリケードを築きまして、このときは女の子の方が元気がいいですね。男の子がおろおろしながら、「やめろよ、やめろよ。そんなことをすると怒られるよ」とか言うけど、「やる、やる」とか言って、堂々とバリケードを築きました。グループ活動の時間は私の担当の時間じゃなかったんですけども、そのリーダーとなつた女の子が夕方、私のところに来て、ちよつと涙ぐんで、「ごめんなさい、先生に迷惑をかけちゃつて」と言うから、「何で」と言つたら、「後でそう思つたけど、でも、私、どうしてもあれを一回やつてみたかつた」と言うんですね。

不登校でうちにいるときは、その子でも体が震えて、うなだれて、食欲もなくなる子なんですけども、逆に言つたら、本当にエネルギーを持つている子だなという思いがいたしました。そのときには浅間山荘事件の動きが、その子にとっては一つのイメージにあつたんだろう、それはいい悪いの問題じゃなくて、「あつ、すごいな」という思いがいたしました。

たくさんそんなことを取り上げていくと限りがないんですけども、その一緒のころの不登校の子が、いろんな出会いがあつたんですけども、「君の名は」みたいなことがありまして、結局二人は結婚をいたしました。お互いが不登校経験のある結婚というのは私にとつても比較的珍しいんですけども、この結婚はある意味では大変なことだつたと思います。相手のお嬢さんの方も私はよく知つておりました。家庭的に大変難しい条件のあつたところの中で、愛情とか、愛とかということについては、私はある種の純粹さに本当に打たれたわけですけども、そのことを思い詰めて、一度死ぬことを考えて、「今、先生にお別れをしようと思つて電話ボックスにいるけども、一度話をしてから死のうと思つている」みたいな電話をもらつて、私はそこから駆けつけて、私の家に連れてきて、結婚の問題

について踏み切ろうという話をしてゴールインをいたしました。

そういうこともありましたし、その相手の男の子——今はみんな立派な成人なんですけれども、教師というのはそういう言い方をして、よくひんしゆくを買うんですが、例えば「教え子」なんていう言葉は、大変教師の傲慢さそのものの言葉なのかもしれません。ですが、日本の社会習慣的な言葉で、私はそういう用語を間ではさみませす——の方の弟もやっぱり不登校。お父さんやお母さんから言えば、上の子が学校に行かなくなるのは何となくわかった。下の子はしっかりしているから大丈夫だと思っただけでも、二人ともやっぱり休む時期がありました。

プロセスというか、経過は随分違いました。弟の方は、今、ある県で中学校の先生をしています。

この間久々に会うことができました。もちろん結婚をして、子どもも健やかに育っております。彼の方があるとき非常に苦しい状態が続いて、私に会うこともできない。バスにも乗れない、外に出ることもできないというときに、兄貴が心配しながらついて来てみたりしながら、でも、転機としては十六、七ぐらいで、何をしようかと迷いながら、いろいろやってみたりしながら、絵が好きだから美大に行きたいという決心をして、わずか一年の準備でしたけども、美大の受験に成功してやっております。

そういう形の活躍の仕方は、一方で、決してそういうことがいいことで、いい例だとは言えませんが、その直後に私のクラスに来た、この子も大阪の方から転入してきて、横浜に来たら学校に行けなくなっちゃった。どうもその辺が気になっちゃうんですけども、彼も中学時代は大変苦しかったです。高校に行くときも大変苦しくて、かなり初期は無理をしましたが、国立の医学部に入って、現在は神奈川県下で立派にドクターとして活躍をし、かつ合唱が好きで、自分で学生時代には合唱団の指揮者をしたり、今もある合唱団に入っていて、いつかも招待を受けて、東京までその合唱団を私は聞きに行ったことがありますけども、今は優秀なドクターとして活躍をしております。

別の例ですが、このお嬢さんは、家族でアメリカに行つて、いわゆる帰国子女だったわけです。日本に帰つてきて、小学校のときは行つたんですが、中学になってパタッと行かなくなりました。彼女が「何をきっかけに行かなくなつたか話そうか」ということで、印象に残っているのは、これは象徴的なことかもしれないけども、「団地でペットを飼つてはいけない」という決まりがあつて、私が学校に行つて帰つたきた日に、管理人がうちの猫を処分してしまつた。その翌日から私は学校に行かなくなつた」ということがありました。

もつとこれを深くいろんなことから考えたら、それ以外のいろんなことがあるんです。彼女はこやかで、ペットが好きで優しい子なんですけども、私に対しては時折ぶつかる時がありました。「何をやっていきたい?」なんて話をしたら、「漫画をかいてやっていきたいんだ」と言うので、私はつい「漫画をかいてやっていくつて大変だよね」なんて言つたときに、彼女はキツとしました。「なぜ日本の先生は、私がやりたいということについてそういう口出しをするんですか。私はアメリカの学校にいたときに、先生からそういうことを言われたことは一度もない。私が漫画をかいていきたいということは私の問題なんです。私は日本に来たときにいつもそういうことにおつかつて、そのことが疑問でしよつがなかつた。私が苦しもうが、私がどんな人生を送ろうが、それは私が選んで、私がやっていくことなんだ」ということを、やわらかでにこやかにいつも話してくれる彼女が、そのときだけは私に向かつてキツとした表情で言つたことを覚えています。「私は高校には行きません」というので、私も「じゃ、ちよつと探してみるね」ということで、こういうのはいいことだから名前を出しますけれども、横浜の伊勢佐木町に有隣堂の本店がありますが、有隣堂の課長さんにお願ひをして、その地下のレストランで働くという形で彼女は自分の人生を始めていきました。

もう一人の男の子のことも印象に残つていますが、この子は、ギターを弾いて、幼稚園のとき

からビートルズが好きだったし、お兄ちゃんの影響で吉田拓郎が好きだったという子だったんですけども、何を誘っても首をかしげて、どうしたいの、どうやっていきたいのというときに、彼の言葉はいつも決まっていました。「自然」と言うんですね。「どうするの」「自然」と言うんです。彼は自分の生き方をずっと「自然」というままでいきました。中学校を卒業して、自然に一年間お父さんの関係したところのアルバイトをしてから定時制高校に行きまして、その後で彼はある種の非常に大きな変わり方をしました。例を挙げると、ビートルズが好きだった彼は、ある日家で、退屈だったからムソルグスキーの「展覧会の絵」を聞いたときに、突然クラシックに目覚めるわけです。ほかにも幾つかそういうことがあるわけですけども、彼は定時制高校の中で、自然に勉強していつて、その後、定時制高校では初めて横浜国大の二部に推薦入学ということをやりました。彼は「自然」ということをそのまま貫いて大学へ進みました。

それから、その後に行った男の子は、これまた別な意味で、中学を卒業してから家にもう一回しっかりこもりました。夜しか出歩きません。そしてどれだけ家にこもったかというところ、自分の部屋に十年間こもりました。夜になると出かけて行くんですが、お母さんが声をかけることを拒否しておりましたけども、女性のスタッフがかかわって、富山県の方の子どもたちを預かってくれるところへ自分が行ってみよう。彼は昔からどこか牧場か農場で働きたいというのが彼の夢だったんです。彼はそこに行つて、やがてその居場所から出て、地元でよく世話をしてくれる工務店の方がいまして、そこで住み込みで働いて、もうそこで一生を過ごすつもりで、バリバリと、今はブルトーザーを動かしたり、大工仕事をやったり、本当におちびちゃんのかわいい坊やだった彼がそういうことも含めてたくましく今生きております。

そういうことを延々と言っておりますたら、もう時間がとつくにたっておりますけども、私はきち

つとした道を、こんな例でいっていると自慢げに聞こえるかもしれませんが。不登校と言われる子たちが、あるところを自分の力で乗り越えていったときに、逆に言ったら、どんな可能性を發揮してするか。そのことを承知してほしいのです。

これも本当に偶然ですが、一週間ほど前に手紙をもらいました。名前が書いてありますから、名前をそのまま読み上げますと、今ここにチラシがあります。菊池一喜・オイリュトミーオリエンテーション（律動的な運動）（オイリュトミー講座）というところで、今度の日曜日にあるわけですけども、彼は一九六六年生まれで、一九八五年から八九年にドイツのシュツットガルトでオイリュトミーを学び、その後三年間、公演活動を通じて舞台オイリュトミーをはじめています。このきっかけは、彼は高校には絶対行かないという宣言をしました。しかし、お母さんが読んでいた、子安美知子さんの「ミュンヘンの小学生」「ミュンヘンの中学生」という本をふと読んで、「ここなら俺は行く」と猛烈にドイツ語の勉強をしました。逆に言ったら、英語は見るのもいやだった。英語の本は全部焼き捨てました。彼はドイツ語の勉強を始めて、そしてシュタイナー学校を見学に行つて、途中入学というのは珍しいことですけども、彼の熱意もあつて向こうが受け入れてくれたのがスタートでした。

彼は大変苦しいプロセスを通りまして、彼は教会に通い始めておりましたものですから、「自分は今自殺だけを考えている。でも、それは神様からは許されないのでできないけども」という苦しさの中から、彼はその道を拓いていった。もちろんそれを支えたご両親の大きな力もあつたと思いますけども、そういうことでやってきております。

今幾つかの例を挙げましたけれども、やつとBGMがカットされ、静かになりましたので、その中の一人として、きょう、学校の先生としての肩書きがついていません、隣にいる坂木先生、私は先生ときょう初めて呼びます。坂木君と呼ぶことはましな方で、大概「坂木！」と言つて、実は私が富士見

中学校におりましたときに、彼は中学時代にしっかりと不登校をして通級していたということで、彼にしゃべってもらえればと思っております。

○内山 どうもありがとうございます。大分時間を経過しましたが、体験上、十例ぐらいの進路と自立を拓いていった実例などが挙げられたと思います。坂本先生、続いてご意見をいただきたいと思っております。よろしく願います。

○坂本（港区立三光小学校教諭） 今、永田先生から紹介にあずかりました坂本

といます。



今、東京都の港区の方で小学校の教員をやっておりますけれども、ちょうど中学のときに永田先生にお世話になっていました。その頃は登校拒否の増加が目立った時期でもあり、五十日以上欠席者の中に自分の数が入っているんだなという感じながら、あのころを思い出します。

そのころ学校に行かなかったということで、きょうはこの席に來させていただきまして、そのころの経験とか体験とかをきょうは話すということで、ここにいるわけなんですけれども、この話をするに当たって、自分の昔を久しぶりに振り返りまして、結構それよりも前から学校というのはきらいだったんだなというのを思い出しました。

一番最初に学校をいやだなと思ったのが、実は幼稚園のころなんです。三月生まれだったもんですから、体が小さくて、いじめられる対象だったもんですから、幼稚園のころから結構いじめられていたんです。幼稚園に行くとき楽しくないんですよ。ほかの子が歌ったり、みんながいっしょになって遊んでいる時でも、一人で遊んでいることの方が楽しかったという感じでした。それに幼稚園の中でいじめられていることがあったりして、「きょうはおなか痛いからいやだ」とか、「熱があるから」と

か言って、仮病を使って休んで家でテレビを見て過ごしているのが好きだった幼稚園時代を過ごしました。

それから、小学校一年から四年まで父の仕事の関係で滋賀県の方に転校しました。二年生のときの担任の先生が結構厳しい先生だったんです。テストとかバシバシやって、これは今でも覚えているんですけども、二年生なのに毎週毎週テストがよくあったような感じで、学校がすごく楽しくなかったんです。そのときに十日間ぐらい連続で休んだことがありました。そのときは学校に行かないことはいけないことなんだと、親からも、先生からも言われて、自分でもそれに対して疑問を持つことはなかったんです。十日目ぐらいに校長室の方に連れて行かれました、「学校に行かなきゃだめだからね」なんていう話を言われて、「ああ、そうか、行かなきゃいけないもんなんだ」と思いました。直接僕はそのとき言われなかったんですが、その後親と校長先生が話して、「精神的に強くないから剣道でも習わしてやったらどうかね。もう少し鍛えなきゃいけない」なんて言われたというのを聞いて、「そうか、自分は心が弱いのかな」なんて思いながら、二年生のころは休みがちだったんですけども、何とか行きました。

その後三年、四年は普通に学校に行っていたんですけども、五年生のときに横浜の方に転校しました。さっきの話じゃないのですけれども、横浜に転校してくると何かあるというのは確かなようで、僕のとくにも、その前の年に転校してきた子が五年生でクラスがえになって僕のクラスにいたのですが、その子に転校した二日目ぐらいに階段のところに呼ばれて、いきなり殴られたんです。「俺は去年、この学校に来たときにみんなからそうやってぶん殴られたから、おまえもぶん殴ってやるんだ」という感じで、その後もずっといじめの対象になりました。最初のうちはほかの子も仲がよかったですけども、ちょうどプロレスがはやっていた時期だったので、力の強い子に技をかけられたりとか、

練習台にさせられたりとか、弱い者同士で闘わせたりする子がいたもんですから、学校に行くときぐいやかな気持ちになっていました。いじめられてけがをしたことも何度かあって、勉強もつまらなくなってきたし、「中学に行ったらもつと厳しいんだよ」なんて先生から言われちゃったと、「ああ、そうか、もつといやかなことがたくさん中学でもあるのかな」と思いながら、卒業を迎えたわけなんです。

この頃は子どもの数がふえ学校もふえたところで、いじめていた子が別の中学校に行ったものですから、最初のころは順調に中学も行っていました。中学校の担任の先生も、男の先生で若かったんですけども、人気のある先生といえますか、受けがいいといえますかね、結構みんなを笑わせてくれたりとか、一緒に遊んでくれたりとかする先生で、「これならやっつけていけるかな」と思っで一学期が過ぎました。

ただ、中学校に入ると小学校とのギャップがすごくあるんだなと感じました。中学校って小学校と違って全部専科制ですね。そうすると、担当の先生が入れかわり立ちかわり入ってくるんですけども、その時中一を教えていた先生は前の年まで中三を教えていたという感じの先生が多くて、結構大人っぽい感じで自分たちに対応してくれるものですから、小学校から来たてでまだまだ小学生のような自分達にいきなり「もう大人なんだから」という感じで扱われてしまって、話していることは難しいし、わからなくても授業はどんどん進むという感じで、授業が全然わからなくなりました。英語も始まったけども、全然つまらなかつたし、数学もわからないし、社会は地理で苦手だからわからないしという感じで、全部わからなくなりました。

当時はまだ体罰とかが結構あった時代で、技術家庭の先生なんかは物を忘れてくると角材でぶったりするんですね。偶然忘れても一回目からいきなりバシッとたたかれたりとか、授業もそういうおどすような感じでやっている男の先生でした。ちょうど学校が荒れていた時期ですから、みんなを抑え

つけなきやいけないという気持ちできつと先生たちはやっていたと思うんですけども、怖いというイメージの先生の方が中学は多かったですね。あと宿題も各教科ごとに出るので、夏休みなんかも寝ないで宿題をやったなんていう記憶があつて、学校に行くだけで疲れてしまうということの毎日でした。

学校で朝会に出ても、すぐ気持ちが悪くなって倒れちゃうし、少しでも熱があれば、僕は喜んで学校を休むことをしていて、学校なんて見たくもないと思つていたんです。でも、自分の中で、学校は行かなきゃいけないもの、行かないことは恥ずかしいことなんだという思いこみが昔からあつたものですから、休むと外に出れない。逆に、もし出かけて友だちに会つたときに、「おまえ、休んでいるのに何でそんなところにいるんだ」なんて言われちゃったら、もうきつと外には二度と出れないだろうなという気持ちで、休んでいたときにはずつと家の中にいたのを覚えています。

休み始めたのは九月の頃でした。一週間、二週間たつて、担任の先生もたまに迎えに来ました。担任の先生でだめだったら、朝友だちを迎えに来させるとか、朝がだめなら放課後だとか、そういう感じで友だちが来たり、先生が来たりしていたんですけども、「早く治つて学校に来いよ」みたいな言い方をされると、別に病氣しているわけでもないのに、逆に余計行けなくなつちゃつたんです。それに誰とも顔を合わせたくないし、親とも顔を合わせたくない。夜起きていたものですから、朝がもつと起きれなくなるという生活を繰り返していました。

一カ月ぐらいたつたときに、担任の先生が「あした迎えに行く」と言ってきました。前の夜は行くかと思つていたのですが、朝になつたら行く気になれず、担任の先生に申しわけないと思つて寝ていたんです。そしたら、両親が仕事を休みまして、「担任の先生が玄関まで来ているんだから行きなさい」と言つたんですね。僕はもう学校というものがすごくいやだつたもんですから、部屋から家の奥

の方に逃げたんです。そこで親二人で引つ張ってでも連れて行こうとしたのですが、結構力も強くなつていましたから、なかなか連れて行けない。そしたら担任の先生がツカツカと家の中に入ってきたんです。全然出てこないし、何か騒いでいるなというのを聞きつけて家の中に入ってきただけですね。そしてグツとつかえまで「さあ、行くんだ」みたいな感じで連れて行つたんです。僕はそれまで休んで、その先生に悪いなという気持ちがあつたんですけども、勝手に人の家に入ってきて、自分の腕をつかんで「行こう」と、そのときにもちろん二人の両親はこっちにいたわけですから、親の許可もなしに入ってきて僕を連れて行つたわけですね。

それをやられたときに、「あつ、この先生もやっぱり自分をただ学校に行かせたいだけなんだな」という感じになつて、がつくりときちやちやして、その日はしようがないので学校に行つたんですけども、二度とその先生とも会いたくなくなつたし、学校にも足を向けようなんていう気持ちは起こらなくなりました。それからずっと家において、またさらに一カ月ぐらいたつたときに、これじゃしようがないというので、きっと学校の方からだと思ふんですけれども、児童相談所を紹介されたんです。最初は親だけ行つたのですが、一度僕の顔を見たいということで、「一度だけでもいいから、遊びに来るみたいな感じでいいから来なさい」という感じで言われたので、昼間だし、誰にも会わないし、場所も近いものですから、電車に乗っていけば平気だし、反対方向だしということで行つたわけなんです。

最初に僕が相談員の人と相談室で話をしました。「ここに座りなさいね」と言われて座つたら、目の前にたくさんの傷や落書きがしてある机がありました。「君はどここの中学なの」と聞くので、「A中学です」と言つたんです。そしたら「この机の傷を見てごらん」と言うんです。見ると暴走族の名前が彫つてあつたんです。そして「A中の子がこれを書いたんだよね」とか言いました。その言い方の中には「君と同じだ」みたいな意味がこめられている感じでした。そのことを聞いて「あつ、この人

は登校拒否は学校に行かないというので悪いことだと思っっているんだな」というイメージを最初に受けました。その後「将棋でもしないか」とかでやったり、三十分ぐらいいろいろ話をしたりとかしたんですけども、やはり言葉の端々に「学校に行かなくていいんだよ」というのが見え隠れするのがわかりました。「この人も、自分がやっていることはすくいいけないことで、学校に行かせなきゃいけないんだな」と思っている人なんだな」と感じ、本当に自分のことをわかってくれてるわけじゃないんだと思いました。その後もう一回ぐらい面談しに行ったんですけども、全然効果もないという感じで行かなくなりました。

そして十二月ぐらいになった頃、ちょうど永田先生がうちの中学の方に講演が何かでいらしたことがあったんです。そのときにうちの母が聞きに行っていて、帰りがけに僕のことを話したらいいんですね。そして「一度会いたい」ということを言われたものですから、その話を家に帰って僕にしたんです。でも、またきつと児童相談所とか、普通の学校の先生みたくに「学校に行きなさい」という感じで言われちゃうのかな、会いたくないなと思っただけです。ですから会わなかったんです。

一月になってから、自分としても随分休んじやったし、何かとしたいな。でも、今の自分の中学には行きたくないなという気持ちになってきました。この時までには永田先生のことは何度か母から聞いていて、何かおもしろい先生みたいだから、とにかく会いにだけでも行ってみようかなという気持ちになって行っただけです。それで最初に行ったときに、自分としては結構構えていたんですね。また、この人も「学校に行け」とか最後は言うんじゃないかなと思って、にらむような感じでいたんです。ところが、永田先生は、ビートルズの話だとか、テレビの話だとか、全然学校とは関係のない話ばかりをされていて、最後に「学校に行かなくていいんだよ」と言ってくれたんです。「好きなことをとにかく今はやりなさい。何でもいいからやりなさい」と言われたんですね。

そういうことを言われたのはそのときが初めてで、今までの人は「学校に行きなさい」と、もちろん直接は言わなくても、意図的に裏では含めて言っているんですけども、永田先生は本当に行かなくていいんだという感じで言っていましたから、そのときに「あつ、ちょっとこの先生は違うのかな。ああ、そうなのか」という感じを持ち、気持ちが悪くなり、「じゃ、今度一週間に一回でもいいから、中学に一時間でもいいから行ってみようかな」という気持ちになりました。でも結局次の週も学校に行けなくて、また永田先生のところに行きました。「行って見たの」と聞かれたから、「行かなかつた」と言っても、「そんなのいいよ、いいよ。別に行けなくてもいいんだからね、そんなことは気にしなくていいんだよ」と言ってくれださったものだから、すごく気が楽になって、永田先生のところの一週間に一回ずつぐらい一年生の最後は行きました。

それから二年生に進級した時、もう自分はずもとの中学に行けなさと感じ、それならいつそ二年生の最初から富士見中の永田先生の教室に行ってみようかなという決意をしまして、それから二年間永田先生のところでお世話になりました。

そのときの校長先生も永田先生と同じような感じの校長先生で、すごく優しく扱ってくれまして、すごくよかったです。それに、ほかの先生たちも永田先生と同様に友だちのような感じでつき合ってくれる先生達でした。教室の帰りに友だちと一緒にゲームセンターに寄っていくわけなんです。四時ぐらいまでその辺を遊んで、「きょうは誰先生を呼ぼうか」とか言って、友だちと学校に電話するんですね。「先生は今忙しいんだけど」「いいから来なよ」とか言って呼び出しまして一緒にゲームをしてみましたとか、ハンバーガーをおごらせてしまったりとか、そういうことをやっていました。その他にもいろいろなことがあったんですけど、僕等のことを真剣に考え、一緒に笑い、泣いてくれた先生たちでした。仲間もいろいろな友だちがたくさんいて、すごくおとなしい子とか、一つのことをず

つと調べる子、一日中音楽をやってる子、先生達には乱暴だけど本当はやさしい子など、「そうか、人間というのはいろんなタイプの人間がいるんだな」というのが、そのときすごくわかりました。それに、どの子もここに来てはじめて自分らしさを発揮していたような感じでした。

みんな同じ学校に行かないでいた仲間がたくさんいるというので、今まで自信を持ってなくて何もできなかったことが少しずつそのときにできてきました。水泳も、プールがないもんですから、みんなと一緒に市民プールに行ったりとかしたら、そのときに偶然泳げちゃったりして、「あつ、泳げるんだ」とか、たまに校庭で遊ばしてもらったときに鉄棒をやったら、そのときに初めてさか上がりができるようになったりとか、体育館を貸してもらっていたんで、バスケットとかやったりすると、授業でやっているバスケットと違って、一応体育という名目でやっているんですけども、本当に遊びでやっているような感じのをやって、「あつ、体を動かすというのはすごくいいことなんだ」なんて、そのときに思ったりして、少しずつ自分の自信を取り戻していききました。

中三のころに進路をどうしようかなというときに、ちよつとずつ勉強を始めたら、全然二年間勉強しなかったのが、三年間分の勉強を半年ぐらいでできてしまいました。「ああ、何だ、やれば中学の勉強は半年ぐらいで三年間やっていることができちゃうときはできるんだな」という感じで、すごく自信を持ちました。性格も結構暗かったりとか、人前でこんなふうには話せなかったんです。先生に対して冗談なんて言える性格じゃなかったんですけども、そのころから「永田先生はたぬきだ」とか、「ムーミンだ」とか言ったり、すごくちゃかしたり、そういうことができる自分というのがわかってきたというか、もともとそういうのがあったと思うんですけども、それが今までつぶされていたんじゃないかなというのがある、「あつ、そうか、そういうのを引き出してくれたのかな」というのを今は思っています。

高校の方も永田先生にいろいろと探してもらいまして、神奈川だときつとまた中学のときの誰か友だちと会っちゃうからいやだなというのがあったので、東京の方を探しまして、東京のT高校というところにうまく入れまして、三年間通ったんです。

そのときにいろんなところの中学からの友だちができたんですけども、自分が学校に行かないという事は隠していたんです。知っていたのは、その高校の校長先生と担任の先生で、担任の先生はそういう事実を知っていますから、「学校は楽しいか」なんていう質問をたまにしたりしました。そういうことを聞かれた日の帰りに友だちから「おまえ、何であんなことを担任の先生から言われたんだよ」なんて言われて、「さあ、何でだろうね。気まぐれで聞いたんじゃないの」とか、「おまえ、学校に行ってなかったんじゃないの」なんて言われると、「いや、それは違うよ」なんていう感じで、そのときはごまかしていました。

自分のそういう過去の経験を知られると、どんなふうになるかというのがまだ怖かったんですね。そういうことに対して、学校というものは行くものだと思っている友だちが多かったから、やはりまだこういうことは言えないなという感じで、すごく隠していました。高三のときに進路を考えた時、何か人の役に立つ仕事をしたくないなと思ひ、自分のような経験を持った子を逆の立場から今度は助けてあげたいな、小学校時代とか、中学時代とかに楽しくない経験をしてきましたから、そういうことをしないで卒業させたい、どの子も楽しいと思う学校を作ってみたいなというのが自分の中にあつたものですから、教師の道を選びました。

大学に入って登校拒否についていろいろ自分なりに調べてみました。そしていろいろな本を読んでいくうちに、自分がやってきたことは悪いことなんかではないということがわかり、自信をもちました。そして、自分から自分の過去を友達の前で話せるようになりました。ちょうどその頃、新聞でも

登校拒否を肯定的にとらえる記事が出始めた頃で、そのこともあって、自信をもって言えたんだと思います。でも、教師になっていろいろな先生と話をするようになって、登校拒否を今でも一番理解してないのは先生かなって思うことが多くなりました。

実は、ここに出るということを校長先生に言ったときに、「いろいろな人たちが来るわけですね。そういうところに出ると、あとで電話とかかかってきたり、いろんなところで知られちゃうわけですよ」と言われたんです。「報道関係の人が来るかもしれないですね。あなたは、自分の保護者の方に出ることを言うんですか」「そういうのは今回は言いません」と言ったんですけども、「言わないようにしてください」という感じで言われたんです。「何ですか」と言ったら、「先生がこういう経験をしたということを親としてはいろいろな考え方を持っている人がいますから、変に思う人がいるんじゃないか」と言われたんです。僕は逆にきょう皆さんにお聞きしたかったんですけども、登校拒否をした人が先生になったら、やっぱり変なんでしょうか。ある意味でマイナスイメージというのを持たれるのでしょうか。校長先生は「いろんな考え方を持っている人がいるから」ということしか言われなかったの、きつとそれ以上のことはわかってないと思うんですけども、僕も親じゃないですからそのことがはつきりとわからないので、ぜひとも皆さんにお聞きしたいんです。もしよろしかったら後でも教えてくださいたいと思います。

どうもありがとうございます。(拍手)

○内山 体験談を含めてですので、幾らでも聞き入ってしまつて時間が過ぎてしまいました。皆さんからのご意見は後でいただくことにしまして、今度は親の会という不登校への援助の仕事などをしておられる立場から後藤さんにお話を伺いたいと思います。お願いします。



○後藤（あさおの会代表） 川崎の麻生区で親の会の世話人をやっております後藤と申します。

ちよつと会の成り立ちを申しますと、ちよど九〇年の四月に第一回の呼びかけというか、麻生区近辺のミニコミ紙に、「不登校に悩んでいるお母さんぜひ集まってお話をしませんか」というコメントを入れてお知らせしまして、そのときにかなりの人が集まって驚いた経験があるんです。四年前というと、川崎には独自に働く親の会というものが全くありませんでした。地理的に南北に長い川崎の中では、全く不登校問題がわからないというのがあります。そういう状況に立ったときに、親はどういうふうにして相談していったらいいかということが全くつかめませんでした。

一番に相談するのは、最初にそういう状況を起こすんですから、学校の先生なんですけれども、うちの子の場合はその当時中学一年生で、坂本さんとは違って、突然体が動かなくなったという形で、見れば病気だから休ませるといふ、気休めもできそうな状態で始まったんですね。でも、学校の先生に「どうしましょうか」といふ相談は皆目何とも相談にはならないという状況があったので、私の場合には、自分なりにそういう親を探しました。そのころは東京周辺は結構親の会が盛んになっておりまして、いろんな会があつたんです。そういうのを新聞とかいろんなもので見つけては参加して、自分なりの解釈を持っていくという形にしていたんですね。

会をつくりましたきっかけは、そのときに川崎ではそういうシンポジウムも何も見えなかったんですけど、たまたま麻生区の成人学級で、「不登校の問題を考える」という講座を一つだけ見つけたんです。それに飛びつきましたら、やはり周辺にそういう問題を抱えた親が何人かおりました。会が終わったら早速集まって話をするというのが始まりだったんです。それで、先程話しましたような呼びか

けで、とにかくどういふ情況なのか、地域でどうなのかを知っていきたいということで、それ以降今まで月一回親の会を開いております。

ですから、私たちの会は運動とかいふことではなくて、自分の周りで不登校に対してどういふ反応があるのかという情報交換が主な目的なんです。近隣の小学校、中学校に行っている子どもを持つ親が集まりますので、ここの学校ではこういう対応をしているとか、こういう先生がいるとか、わかっている先生もいれば、むちゃくちゃな先生もいるとか、いろんな情報がありました。その中で私たちは、自分が積んできた体験をみんなでお互いに話すことで安心するというか、そういう状態をつくって、まず親が元気になって子どもに対応するという姿勢を今もやっているという感じですよ。

きょう、こういう会に出させていただいたのも、子どもの進路とか、自立に関する考え方は不登校問題の中ではいろいろありまして、結局最終的には学校に戻したい意思であるのが行政側の立場であると思うんです。私たちはそういうものを否定はしませんが、戻すことに対しては懐疑的な立場でやっておりますので、きょうの集会の中でどういふ話し合いが持たれるかわからないですけれども、そういう考え方を持った親の立場としてここに参加させていただきました。

今、私たちの会では中学三年生に在籍している子ども結構多いんですね。そうすると、卒業以降の進路というのが問題になりますし、その前にも、一番大きな問題が卒業になるんですね。卒業させてもらえるかという話。幸い川崎の場合には、余り大きなトラブルはなくて卒業という形はとれているんですけれども、そこに行くまでに一つや二つの関門といえますか、いやな思いといえますか、大変な思いを親は必ず学校側から受けます。それを何とか乗り越えれば、それなりの卒業はもらえるという感じで今の状況はなっているようです。

教える側から見ると、学校に全然来ていない子どもが、学力もなしに卒業していいものかという疑

間がおありになると思うんですね。でも、私自身、自分の子どもを見ていまして、子どもの知識というのは段階的に入っていくものではなくて、それをやろうとする意思とエネルギーさえあれば、短時間の中でそれを修得していけることが、たくさんの子どもの話とか、親の話を聞いても割と見えてきているんですね。坂木さんもおっしゃいましたけども、半年で三年間分の勉強ができた、そういうところがあります。どうしようもできない体にむち打って、学校のいろんな行事をこなしたりとか、授業にのぞんでも全然頭に入らないという状況があるわけなんです。ですから、形の上で子どもが学校に行って生活することが、その子にとって、今から先、生きていくのに必要な学習なり、体験を得るものであるかということは、外からは全然わからないことであるので、場所にこだわらない生き方をさせたいというのが、まず親の中に出てくると思うんですね。

学習なり、体験なりすることは、学校だけではなくて、地域であり、家庭であり、世の中いろいろなたくさんさんの所があると思います。ところが、一応小・中学校の義務教育段階にある子どもに関しては、行かねばならない学校の中でしかそういう学習を受けてはならないみたいな解釈があるようで、外で会得するものに対しての評価は全くどこでもなされないということ、それができるものは唯一親だけじゃないかと思うんですね。

ですから、不登校の子どもを学校に戻すという考え方をまずなくしてしまわないと、その子どもがどこで生きていくためのいろんな力を身につけていくかは、そういう枠を超えて考えていかなきゃいけないんじゃないかという気がします。

進路に関して私たちの中でいろいろ問題にされるのは、中学を卒業した時点で結構元気のいい子どもに対しても、親は子どもがどこかに所属していないと、それは子どもにもあるんですけれども、所属意識みたいなものが日本の社会では随分強いんで、宙ぶらりんの状態というものに関してすごく

不安感があるんですね。そうすると、子どもにどんな形でもいいからとにかく何か所属してほしいということになると、例えば高校受験で考えると、学力的に弱くても行ける高校を親が必死で探すようなところがあるんです。例えば通信制とか、単位制も最近はずいぶん厳しいんで、そう簡単にいかないでしょうけども、定時制とか、学校の先生もそういう所を勧められる方がいらっしやるんですけれども、子どもがそこに通ってやっていけるかということが基本になるんですね。

だけれど、気持ちの中で親にも、当人にもあせりというものがあって、とにかく形だけでも進学という形をとりたいとかいうことにとらわれますと、もし行かれなくなったら二度目のダメージを受けるわけなんです。そのダメージから抜けることがとても大変なことで、割とそういうことで不登校の悪い状態を長引かせてしまうというのがあるんですよ。ですから、いろんな人が子どもの進路とかを心配してあげて、今どき高校教育を受けていなきゃ絶対自立できないみたいなのころの考えがあまりすので、とにかくそこまでの学習というか、勉強とか、力をつけさせなきゃ世の中に出てはいけなみたいな感じで、子どもに暗黙の圧力が周りからひしひしときますので、子どもがとにかく、親なり、周りが納得するように、とりあえずそういう形をとったりしますけれども、周りがそういう圧力をかけないようにはやってあげると、子どもは「十五の春」といいますか、そのネックを割と楽に越えていけるところがあるんですね。周りから見ると宙ぶらりんの状態ですけれども、子どもが育つ一つの段階で考えますと、そのときに高校に行つてやる学習をしなくても、もつと違う体験なり、勉強が周りで得られることがすごくあるわけなんです。

だから、そういう意味で考えると、学校とか、学歴とかいうものが、一回親の頭の中から全部振り払われないと先にはいかないという感じがします。親の会でも五年も六年もそういう経験を積んでいきますと、大分肝がすわつてきますから、そういうことに対して割とおおよびに構えられるんですけれ

ども、行かなくなつて二、三カ月とか、半年、一年ぐらいても揺れ動く親は多いと思うんです。親の立場というか、不登校の子どもを持った親としては、今ある社会の概念というものから一回棒を外して、一から自分を立て直すことをやらないと、自分の子どもというものが理解できないんじゃないかという感じが、すごく親の会をやつていて思います。

私の子どもが不登校状態になつたのは五年前なんですけれども、それから五年たつて今の状況で考えると、結構性急な親が多くなつたというのか、私たちの時代は半年、一年ぐらいは割と個人でじたばたしている時期があるんですね。すごくつらい思いが長かつたというのか、近ごろはうちの会に来て、「どのぐらゐ学校に行かなくなつたんですか」と聞くと、一カ月だとか、二カ月だという親も結構いるんですね。つまり、余り情報がバンバン入つてきているものですから、ほんのちよつとした子どもの一休みを大層にとらえちゃうというのかな、十日休んだ子どもに、「これは不登校で大変だ。どうしたら学校に行けるようになるかな」と、あわてふためく状況があるんですね。それは学校教育の中では子どもは休めない、休んでは取り残されるという強迫観念が学校の中にあるんじゃないか。特に中学はそうなんですけど、一日休み、二日休み、一週間休んだら勉強についていけないとか、学校の勉強自体じゃなくて、学校のいろんな活動の流れについていけないという状況がともあると思うんですね。

そういう学校のすごい速いリズムの中に子どもが入っていますから、時々休んで一休みしたいとかはとても望めないというのか、本当だつたら一週間ぐらゐのんびり休んだら現場復帰じゃないんですけれども、しっかり学校で活動できるような子どもも随分多いと思うんですね。それが最近逆は早く判断を下されてしまつて、不登校の対応みたいな、対応といっても、その子をじつと見守るのではなくて、応急処置的な対応が結構出てきて、もうパッと、レットテル張りですね。そういうことをやる

状況も何か見えているような気がするんです。

きょうのこういう研究会ですと、学校の先生なんかも多いと思うんですけども、少なくとも私自身の体験の中では、不登校問題に関して教師と親が話し合い、そのことを考え合うことが全くなかったのは確かですし、私たちの今の親の会の中で、良心的に考えられる先生はたくさんいらっしゃる一緒に考えていきたいと思っても、親の会には先生は入れられないという状況がはつきり言っています。というのは、当事者でない者を親の会の中に入れますと、解釈を勝手にされる危険があるんです。あと、親が安心して話せない。やはり学校に行かない子を持った親は、最初に学校側との対応で苦勞しますので、不信感がすぐあるわけなんです。何が原因かということがまず最初に頭で浮かびますから、この間の新聞でもあるように三者三様、親が原因、子どもが原因、学校が原因というように、みんな違うことを言っているみたいなのところがありまして、そういうところから教師と話してもしようがないみたいなことと、あとは部外者が入って親の会をやりますと、自分の本音を言えないですね。自分が言ったことが子どもに返ってしまうみたいな不信感があって、どうしても共通で話し合い、解決していくことを目指す場をつくりにくいと思います。

私たちには、不登校というこの本当の理解は現場にいる先生方に一番していただきたいという気持ちがある切実があるので、本当は機会を見て、こういう学習をうんとしていつて、子どもを主体に置いた教育というのか、さっき出ていた「子どもの権利条約」ということもありますけれども、『子どもの人権』を守るような学習形態が学校の中で育っていくにはどうしたらいいかということでは、教師と本当に手を取り合っていかなければいけないんですけれども、その前にお互いの信頼関係を持ち得るいろいろな経験なり、場をどうやって持っていけるかというのが、一つの問題じゃないかと思えます。

そういう意味で子ども達の進路とか、自立を考えますには、不登校の子どもを持つ親は十五歳、十八

歳を見るんではなくて、十年、二十年の単位で子どもが育っていくことを見ていくところでは気の長い話ですし、逆に言うと、学校のとてつもなく速い流れの中に子どもを入れるようなことをしていませんので、とてもペース的にはゆっくりと、のんびりとできるというすごい利点があるんですね。それは不登校をしている当の子どもだけでなく、兄弟たちにもとてもいい影響があって、学校を中心とした家庭生活をなくすことは、こんなにすばらしいことかというのは体験してみなきやわらないということが本当にあります。

ですから、地域や家庭や学校で子どもを育てるリズムなり、流れというものは、本当に子どもを主体に考えていかなければいけないことであるから、そういう意味での学校改革は本当に切実に望んでいるところです。(拍手)

○内山 どうもありがとうございました。

いろいろな事例から始まって、後藤さんからはご自分の体験を交えて、いろいろな問題提起もされていたかと思えます。時間も大分過ぎて、後半の討議の時間が迫ってまいりましたけれども、もうひと方、武田先生、今度は現職の高等学校の先生でいらっしやいます。先生は高等学校の中では定時制も経験しておられますし、今、指導困難校というところも経験されたり、その中で体験もお持ちでいらっしやいます。今、後藤さんからも中学校卒業後の進路を拓いていくということで、高等学校の問題がちよつと提起されていたかと思えますので、その辺もお話の中に入れていただいております。よろしくお願いいたします。



○武田（県立保土ヶ谷高等学校教諭） 川崎には実は何年間かおりました、住吉

高校の開設当時から六年間住吉におりました。その前にもいわゆる「一〇〇校計画」の新設校を経験してまいりまして、その中で登校拒否の子どもに出会って、

これは一体何だろうという疑問を持ったわけです。大抵教師が第一に考えるのは、「こいつ、サボっているんだ」と思うわけですけれども、サボっているという感じではない。それから「病気である」というふうに考えるわけですね。「心の病気」

と言う非常にいいわけですけれども、「心の病気」という言い方にはいろんな問題があります。先ほどから出ているレッテルを張ってしまう、ラベリングということの問題があります。例えば高校の場合には単位認定をして進級判定をするという問題がありますから、「この子は登校拒否という病気で」と、場合によっては医者や診断書をもらって、特別に考慮を願いますという形で進級させる。そういう方便としては大変役に立ちまして、私もそういう手を使ったことがあるんですけども、しかし、本当に登校拒否って病気なのかといったら、私はそうではないとはっきり言うべきだと考えております。

進路と自立というお話で、高校の教師だからというお話があつて、これはまずいなと思つたんです。というのは、私はそういうふうな形で登校拒否にかかわつてまいりまして、住吉のときはかなり重症な登校拒否の子がいました。この子を進級させるかどうかという話になりました、ある教員が「こういう子は定時制か通信制に行けばいいんですよ」という発言をしたんですね。私は担任だったんです。カチンときまして、「それはどういう意味ですか」と言つたんです。そうしたら、相手の先生も私の質問のニュアンスを大変よく受けとめたといいますか、何も言わないんです。「私は絶対にこの子の単位を認めません」という話になつちやいまして、大変私としては行き詰まったという経験がございます。

結果を言いますと、その子の場合には校長のツルの一声で進級が決まってしまったんですけども、私はそのことをきっかけにして、カウンセリングの勉強をしまして、高校教員の特別活動研究会というグループの中の教育相談部の副委員長ということになってしまっているんですが、ただ、先ほどからお話が出ているように、カウンセリングで「治療」をして学校に戻すという発想はやめた方がいいと私は思っています。

これはいろんな経過があるんですけども、そういうことがあつた後に、じゃ、登校拒否の子どもと初めからつき合うにはどうしたらいいか、定時制か通信制がいいだろうということまで定時制に移って、ずっと定時にいるつもりだったんですけども、体を壊してしましまして、今の保土ヶ谷高校に六年ぐらい前に戻って、ここは、いわゆる教育困難校です。いろいろ言葉を変えると、何か中身が変わったみたいな話になって、「課題集中校」であるとか、「底辺校」という言葉をこのごろ使わないですけれども、私は、そういう言葉の言いかえはうそだろうと思っっているんです。私ははっきり「底辺校」だと言った方がいいと思っっているんですけども、ただ、底辺もいろんな段階がありまして、最底辺ではないんで、普通の高校から移ってきた先生は、「この学校は何て学校だ。とんでもない学校だ」と言うんですけども、私は定時制の経験がありますから、まず大抵の学校は大丈夫なんですな。「冗談じゃない。この学校の生徒はちゃんと授業も受けているし、出席をとつても代返しないし、すごく授業のやりやすいいい学校だよ」と言うと、げげんそうな顔をする先生がおりますが、私は、今、高等学校というものは一つにくくって話ができないと思っっています。

誰か書いていましたけども、今の高校生は例えばフランスの現代思想の本を原書で読んでしまふ高校生から、ABCが書けない高校生から全部いるわけですから、それをまとめて「高校生」と言うのは何なんだと。例えば受験の塾が出している学校の案内書がありまして、ある有名な受験塾が出して

いる進路のガイドブックです。よく見てみると、私の学区で言いますと、私の学校までは出ているんですね。その下の学校はもう名前が出ていないんです。つまり、これは高校の進路として考えても意味がないということなんです。私は現場にいますから、それは大変よくわかるんです。

もつと言うと、うちの学校なんかも実際に大学に行くのは三分の一にいきませんから、高校の進路としてメリットがない、受験という観点から言えばメリットがない。名前を言っちゃってあれですけども、横浜の私の勤務地の学区ということで言えば、例えば〇〇ぐらいから上じやなかったら高校に行く意味がないとはつきり言う人もいるわけですよ。私はそれははつきり言っちゃったらいと思っうんです。県は「そういう高校間格差は一切ありません」なんていまだに言っているわけですから、そんなばかな話はないわけですね。

そういう高校の現場の話は、また後で必要があれば申し上げますけれども、私は、そういうふうにかウンセリングをやってきたんですけれども、それで学校へ戻してしまうことに疑問を感じるようになったと申し上げました。今、手元にお配りしました「非学校化論と登校拒否」というプリント（註1）がありますので、それを説明する形でお話をさせていただきたいと思えます。

短い時間でなかなか十分に申し上げられないかもしれませんが、前回のシンポジウムの記録の最後に質問で、「登校拒否の原因って何なんでしょ」という質問を出した方がいらっしやるんですね。登校拒否の本ってたくさん出ているんですけども、原因について明確に述べている本は私はないという気がするんです。

例えば、一番上に「自我の未成熟」と書いてありますけれども、これはご承知のように、その左の一番下、「どの児童にも起こり得る視点」という文部省初等中等教育局長の通達、これは一九九二年、ちやうど十年ぐらいで文部省は登校拒否に対する見解を百八十度転換をしたと言ってもいいと思うん

ですね。私は、これは一体なぜなのかということをも文部省はもつとちゃんと説明する必要があると思っ
ています。

いずれにしても、「自我の未成熟」という、生徒の性格に問題があるという視点は、今や成り立たなくな
ったということが言えるだろうと思うんですね。

二番目は心理学者の、この方はこのとき筑波大学の助教授で、書いたのは大分前みたいなので、あ
るいはこれを引用すると迷惑かなと思っただけでも、本自体は八九年ですから、そんなに古いも
のではない。かなり大きな「教育相談事典」という事典からとったんですけども、「心因性登校拒否」
本人の心理的理由であると言っているんですね。これは基本的には文部省のいう「自我の未成熟」と
同じ本人の性格とか心理とかいうところに原因を帰しているということなわけです。しかし、これは
先ほど申し上げたように、文部省自身が今日では否定をしているわけですね。

たしかきょうのテーマも「不登校」となっています。私は、さっきの「課題集中校」という言い方
と同じで、「不登校」という言葉が一般化してきたのは森田洋司さんの研究以降だろうと思っていま
す。学問的な研究としては森田さんのものが一番きちんとしたといえますか、テータをそろえた実証
的なやり方で研究をしている。しかし、森田さんの「不登校」の定義はそこに書いてあるんですけど
も、説明なんです。恐らく実際に不登校をしている本人とか、あるいは親の方から見たら、「こんな
ことを幾ら言われてもしょうがないわよ」という話になると思うんです。だから、「不登校」という言
いは逆に問題をあいまいにするだろうと思うので、私は、積極的に「登校拒否」という言葉を使っ
た方がいいんじゃないだろうかと思っています。

四番目、五番目は心理学者。小沢さんは臨床心理学の方なんです。実は私がカウンセリングに疑
問を感じた一つは、小沢さんから「武田さんはまだカウンセリングって信じていらっしやるんですか」

と言われたんです。小沢さんってずっとカウンセリングをやってきた方なんですけれども、今、カウンセリングそのものに対して疑いを持っているんですね。そこに書いたようなことを書いていらつしやるんです。これは私は大変なことだと思います。登校拒否は、子どもたちの文化革命というわけですね。

それから、異議申し立てという内田さんの表現ですね。私は大体このところが重要だろうなと思つていんです。ただ、特に内田さんなんかの表現の背後といえますか、学校のあり方に問題があるという議論になつていくんですね。学校の管理主義であるとか、体罰教師がいるとか、それは確かに事実だろうと思つんです。なぜ学校がそういうふうになつていくかということの説明にはまだなつていないということなんです。

我田引水で申しわけないんですが、私が住吉にありましたときに本を書きまして、いわゆる「非学校化論」という議論が、「脱学校化」と一般には言われているんですが、めんどろなことを申し上げて申しわけないんですが、これは誤訳であるという指摘があります。私は一般に「非学校化論」と言っているんですが、近代化の過程というものは学校化の過程であると。近代産業社会が行き詰まっているのが今の状況ですから、産業社会を支える、イリイチなんかは「隠れたカリキュラム」と言うんですが、もう少し端的に言つてしまえば、工場の労働者を生産するためのトレーニングの場所が学校であつた。だから、時間割を決めて、ある時間からある時間まできちつと定められた課題をこなすことを要求されていく。

そういう意味で学校化ということに対する生理的なのといえますか、あるいは前の人たちの言葉をかれば、体全体でそれを拒否していることに子どもは気がつき始めていると私は考えております。

そういうふうに言いますと、「あいつ、すごく過激なことを言つている」と思われるかもしれません

が、その上にあります「子どもたちが語る登校拒否」（世織書房）という大きな本が最近出て、大変話題になっていきます。はしがきのところで石川憲彦という医者がかなり長い文を書いているんですけども、石川さんの言っていることはもつと過激なんです。要するに大人の文化はだめだ。学校に毒されちゃって、学校を出たような大人の考え方はやめた方がいい。学校に行っていない子どもだけが新しい文化を拓き得るんだ。そういう言い方をしていますね。私は、そういう側面をきちんと見えないかと、登校拒否の問題は解決できないと思うんです。そうすると、登校拒否の問題が一番理解できにくいのは学校の教師だと思っんです。何といつても一番学校化されちゃっていますから。ただ、「学校化」という言葉で、「脱学校」という言い方で誤解を生んでいると思うんですけれども、学校をつぶしてしまえとか、最終的には今のようなスタイルの学校はなくなつた方がいいということになるのかもしれないと、学校をやめてしまえとか、そういうことではないんです。

学校以上に学校化している部分がたくさんあると思う。例えば会社がそうですね。日本の企業、会社本位主義という言葉がこのごろありますけれども、日本の企業、会社ほど学校化している部分はないと思います。それから官僚社会がそうですね。役所ですね。警察ですね。警察に行くと感じるくらい学校化していますね。警察は学校なんかよりはるかに効率的に教育をやっていますよ。それから病院とかですね。これは例えば近代社会は官僚主義化していく社会であるという規定がありますから、それをイリイチの場合には「学校化」と置きかえたわけですから、大体そういうふうと考えていくと思います。

むしろ学校というものは、日本の特に会社本位主義社会の中では比較的學校化されていない、合理化されていない部分だつたと思っんです。ところが、だんだん、特に学歴社会への加速が強まる中で、非常にゆとりがなくなつて、そして追い詰められてきたということが今のような学校というものを生

み出してきたといえますか、行き詰まるような状況にさせてしまっている。私なんか大変しんどい学校におりますので、授業がやっと成り立つか成り立たないかというところにおりますので、定時制のときはそうでもなかったんですが、この頃授業をやるのがいやなんですな。

いわゆる高校の「底辺校」の経験というのはしてみないとわからないのかもしれないけれども、小学校、中学校の生徒って、いろんなことを言えば、何となく授業を聞いてくれると思うんですね。高校ぐらいになると、大部分の生徒は聞いてくれないんです。大部分の生徒が聞いていない、勝手なおしゃべりを大きな声でやっている中で授業をやるのは苦痛以外の何ものでもないんですね。そういう状況がかなりの学校で、これは私の学校だけではありませんで、神奈川県で言えば、各学区にそういう学校が二校から三校ありますから、皆さんもご存じだと思いますので、名前を言わないでおきまされども、神奈川県だけでも三十数校あるわけですよ。これは全国そうです。

もう少し言いますと、恐らく欧米でもそうだろうと思うんです。先進国に共通の現象だと思っすね。それはつまり学校化した社会というものは行き詰まっていることの証拠だと思っすね。

きょうの午前中に実はマラソン大会があったんですけども、途中に立って「走れ、走れ」と言うわけです。生徒が歩いちゃうんです。ちょうど私のところは最後の上り坂のところなんです。五百人以上走ってくるわけですけども、数年前までは最後の百人ぐらいになると歩き出す子がいた。大部分の生徒はとにかく最後まで頑張って走っていたんですね。今は逆なんです。女子なんかで走っているのは最初の十人ぐらいですね。多分私のところが上り坂なんで、終わった最後の平地になると少しまた走り出すのかもしれないんですけども、あとの三百人ぐらいはほとんど歩いちゃいます。

ことしはそうでもなかったんですが、去年は、一番最後から体育の先生が追い上げてくるんですけども、十人ぐらいいましたかね。最後から来た先生が、「武田さん、この子たち最初から最後まで全部

歩いちゃったんですよ」というんです。もうマラソン大会にならないんですよ。まだ男子の方が追い立てると走るんですね。それでも三分の一ぐらいじゃないでしょうか。

そういう話はたくさんありまして、これから教科書販売をやるんですけども、学校に本屋さんが来て教科書売るわけですね。そうすると、四人から五人に一人は教科書を買わないんです。これは進級できないからとか何とかじゃなくて最後まで買いませんね。学校の販売が終わってからも近くにある本屋さんに行けば買えるわけです。四月になってから教科書を買っているかどうかをまず点検するみたいなことをこのごろやらなければならぬ。これは本屋さんに聞いた話なんです。「武田先生、この学校はまだいい方ですよ。我々は本屋ですから出版社に返品すればいいんです。出版社はいろんなどころから教科書を返品してくるので、今、音を上げています」と言うんです。教科書はご承知のように部数が決まっていますから、これだけは売れるというのでコストが決まるわけですね。恐らく教科書会社は今大変厳しくなっているんじゃないか。全国的な現象ですね。脱教科書ですね。

そういう話は、私は底辺校だからそうだと思っていたんですね。そうしたら、いわゆる受験有名校ではどういことが起こっているかというと、三年生は一月は午前中まで授業があるわけですね。二月の初めに卒業試験があって卒業する。一月になると、受験有名校の場合には三年生はほとんど来なくなる。授業は午前中にちゃんとあるんですよ。この間横浜のある受験有名校の教師に聞いたら、十二月で大体半分だそうです。毎日教室に行っても二十人いるかないかだそうです。「気楽でいいですね」と言っただけです。

そうすると、うちの学校の生徒は受験に関係ない生徒が大部分だからということもあるんですけども、冗談で「うちの生徒はよく学校に来るね」と言っていたんですけども、実際には欠席日数でひっかかっちゃう子が随分出てくるんですけども、それはまた別の問題で、そういう形で生徒の側から非

学校化が起こっていると思います。

イリイチは、「我々が考えている以上に早く学校のシステムは崩壊をするんじゃないか」と、ある種予見めいたことを言っています。私は、今全日制の普通科の底辺校で起こっていることは、既にある種の非学校化だと思っているわけですね。そういうことを見えていかないと現実が見えていかないんじゃないかと思うわけです。

あんまり過激なことを言っちゃっていいのかなと思っただけでも、そのプリントの一番最後にブルデュー（フランスの社会学者）という人の象徴暴力「すべての教育的働きかけは恣意的権力による押しつけとしての象徴的暴力である」ということですね。私は、この文章を見たときに、何もここまで言うことはないんじゃないかと思っただけですね。しかし、私は今これが実感です。定時制の生徒を見ていると、それは実感ですし、「底辺校」の生徒を見ていると、本当に授業って暴力だなと思うんですよ。

「学校にいと頭痛が痛くなる」「学校にいと自分が否定されるような気がする」という作文を、定時制の生徒が書いているということを、佐々木賢さんが例の「怠学の研究」（三一書房）という中で書いています。

それは極端だとは思いますが、しかし、そういう視点を我々が持っていないと、特に教員が持っていないかと、教員が一番学校化されていると言ったんですが、イリイチは別な形で、そういう現在の教育制度の中にいる人間が非学校化のためにできることはたくさんあると言っているんですね。これは具体的には私なんかもまだ見えてこない部分が随分あるんですけども、このごろ学校を軽くするなんていう言い方がありますけれども、学校的でない部分、先ほど坂木さんが永田先生に会ったときに、「学校に来なくてもいいんだよ」と言われてほっとしたと、そういう対応は学校の先生はできる

んじゃないかと思うんです。ただ、非常に難しいことは事実だと思うんですよ。自分が教師をやりながら学校を否定するような言動をすることは大変難しいわけで、矛盾そのものを生きるしかないわけです。しかし、それはなぜかと言ったら、今の社会に矛盾があるわけですから、矛盾のある社会の中で矛盾のないように生きようとしたら、それは非常におかしなことになると思うんですね。

私も若いころは随分金八先生みたいなことをやっています、私がこういうことを考えるようになったきっかけを最後に一つだけあげますけども、住吉高校というのはご承知かもしれませんが、新設校の中で非常に偏差値が高くなつたんですね。それは住吉に最初の年に行つて、とにかく自由で伸び伸びとした、生き生きとした学校をつくろうとして一生懸命になつたんですね。私は、半ば自負を持って言っているんですけども、そういう学校ができたと思っていました。特にある時期までの住吉はそうだったと思っています。今は大変変わってきちゃつたみたいですけども、そのことを周りの中学の先生なんかは評価してくださつたと思っています。

ところが、どういふことが起こつたかというと、住吉の偏差値が高くなつたら、ほかの学校の偏差値が下がるんですね。当たり前のことなんですけどね。ですから、一つの学校で一生懸命になつてよい学校をつくるという努力は、全体ということを考えたら全く虚しい作業なんです。それはよく考えてみると当たり前のことなんで、今どこの学校に行つてもそれをやっていますよ。特に底辺校と言われる学校はそれをやっています。底辺校でしのぎあつて一生懸命やればやるほど状況が悪くなるというんですね。ハツカネズミですね。ばかばかしいからやめようということです。ばかばかしいからというのちよつと言ひ過ぎなんですけれども、そういう構造なんだということを認識する必要があるということなんです。

大変言葉が足りなくて申しわけないんですけども、また後で補足いたします。

(註1) 武田先生の資料プリント

非学校化論と登校拒否

武田 利邦

一、諸定義

(一) 自我の未成熟

文部省

「生徒の健全育成をめぐる諸問題——登校拒否問題を中心に」

(一九八三年)

一般に登校拒否の生徒は自我の発達が未熟で、自立性に乏しく、すぐ逃避的になりやすい傾向がある。このため生徒自身の性格傾向そのものを改善することが大きな課題となるが、このような生徒を生み出した原因が家族関係にある場合が極めて多い。

(二) 学校恐怖症

真仁田 昭

教育相談事典(金子書房)

(一九八九年版)

健康を害したとか、家庭のある事情のためとかいう客観的に認められる理由はなく、ただ本人の心理的理由から、学校へ行きたくない状態をいう。これを心因性登校拒否とか、神経症的登校拒否、登校拒否症などと呼ぶこともある。

(三) 「不登校」現象

森田 洋司

「不登校」現象の社会学(学文社)

(一九九一年初版)

不登校とは、生徒本人ないしはこれを取り巻く人々が、欠席ならびに遅刻・早退などの行為に対して、妥当な理由に基づかない行為として動機を構成する現象である。

(四) 子どもたちの文化革命

小沢 牧子

心理学は子どもの味方か?(ウイ書房)

(一九九二年)

「学校的なもの」こそが、いま子どもたち人間として扱っていないのだということを子どもたちは大人に伝えることはできない。その道が断たれていることは自明だ。このような事態のなかで、「学校的なもの」に対する拒否反応が、いきものとしての子どもたちに現れてくるのは自然なことであらう。(中略)

不登校は、「学校と学校的なもの」の苦痛をがまんしすぎたために生ずる、心身の自然な現象」である。

(四) 子どもたちの異議申し立て

内田 良子

子どもたちが語る登校拒否 (世織書房) (一九九三年)

登校拒否は一人ひとりの子どもたちがそれぞれの場で受けた学校教育への直接の異議申し立てであり、プロテストとしての具体的表現といえるでしょう。(中略)

学校を休むことの危険をいち早く予知した子どもたちは、「学校を行きたくない」とは口に出しません。むしろ、「学校へ行きたい」と口にしながら、食事が食べられなくなり、不眠で眠れなくなり、心も身体もやせ衰えて病的な状態になっていきます。誰かが気がついて「学校を休んだら」と言ってくれるのを心待ちしながら、必死で学校へ通い続けます。

(六) 学校化の拒否

武田 利邦

進路不安症候群の時代 (労働経済社) (一九八六年)

登校拒否は「学校」への拒否ではなく「学校化」されることへの拒否であり、「いじめ・体罰」の原因も、過剰に「学校化」された学校にあると言うことができる。

(七) どの児童にも起こりうるという視点 文部省初等中等局長

各都道府県教育委員会宛通達 (一九九二年)

「登校拒否はどの児童にも起こりうるという視点にたち、学校は児童生徒にとって自己の存在感を実感でき精神的に安定していただけることのできる場所心の居場所としての役割を果たすことがまとめられている。

(八) 無登校 保坂 展人

学校からの「集団離脱」(雑誌ドリコムEYE) (一九九三年五月号)

「登校拒否」という言葉が学校に疲れ、また学校に行かねばという自責の念と戦いながら、苦悶する時代の子どもたちをイメージしているのに対して「不登校」は言葉への余分な意味付与を排除して、とりあえず「学校に行っていない」というありのままの状態を表している。

ところが「たまりば」で会った子どもたちや、他の居場所で出会った子どもたちが好んで「学校をやめた」という言い方をするのを聞きながら、すでに「無登校」あるいは「学校離れ」という言葉がふさわしい子どもたちが登場していることを感じた。

二、非学校化または、学校のない社会

(一) 学校化された文明社会 山本 哲士

学校の幻想 幻想の学校教育のない社会 (新潮社) (一九八五年)

学校で過す時間が長ければ長いほど、学歴が高ければ高いほど、人間は賢くなるのではなく愚かになっていきます。(一九頁)

学校へいくことを日常生活世界にくみこんでいるわたしたちは、史上例のない、とんでもないおぞましい文明を背負いこんでいるわけです。学校Ⅱ教育制度を考えることは、日々の生活スタイル、自らの生活様式を根底から考え直すことでもあるのです。〈教育〉を学校の枠内に閉じ込めて論じてい

るわたしたちの意識とは、学校化 \parallel 制度化された意識です。学校の政治は、人間のすべての諸関係を学校化し、それを再生産することにあります。この学校化された意識を脱皮するには、学校による再生産の政治を、まず見抜く学習をすすめることからはじまります。(二〇頁)

(二) 子期的階級関係 学校とは何か社会的諸関係の総体としての学校 田中 節雄

現代の教育理論(社会評論社) (一九八八年)

子期的社会化とは、やがて所属することになる集団の規範や行動様式をあらかじめ内面化することであるが、同じように〈子期的階級関係〉とは、やがておとなになって入り込む「階級関係」(あるいは、ここでは「階層上の相対的地位」といつてもいいが)が、子どもの時期にあらかじめ先取りされていることを表している。(中略)

したがって子どもは、学校へ行くことによって〈子期的階級関係〉のなかに入り込むわけである。

(八一頁)

(三) 象徴暴力 P・ブルデュー

民衆のカリキュラム学校のカリキュラム(新評論) (一九八三年)

すべての「教育的働きかけ」は、恣意的権力による文化的恣意性の押しつけとして、客観的に、象徴的暴力である。(一八九頁)

○内山 武田先生からも何か大変な問題提起があったような感じなんですが、本日は本当は十分ぐらい休みがとればばと思っていたのですが、問題が問題だけに各シンポジストから大変聞かされる話ばかりでして、ちょっと押しとどめるには忍びないという感じがしましたので、お話を続けさせていただきました。お休みもとらないでということ、あと残りの時間を使わせていただきたいと思ひます。ご了承ください。

それでは、あと三十〜四十分しか時間をとれないかと思ひますが、今差し当たって、シンポジストの方で何か一言言っておきたいことがございますか。よろしゅうございますか。

それでは、「進路と自立を拓く」ということで始まったわけですが、なかなか問題が見えてこない部分もあろうかと思ひます。フロアの方たちから、ご質問やご意見も交えて結構でございますので、シンポジストの方を交えて一緒に考えてみたいと思ひます。どなたからでもどうぞご発言を願ひたいと思ひます。いかがでしょうか。

○(母親) 先ほど後藤さんがおっしゃいました、学校を考えない家庭生活のすばらしさとか、兄弟にいい影響を与えたということですけど、家にも今中二の男の子で、上の子なんですけど、学校に行っていないんです。それで、下の子が「お兄ちゃんはずるい。」という考えで、親は少しづつ学校に行けてないということ認めてきたけど、下の子はそれに対して、学校には行かねばならないという固定観念をすごい持っているものですから、それで、攻撃をするというか、強いことはで攻撃するんですね。それでつい喧嘩になるんです。そういう下の子に対する親の態度というのが、全然つかめないで、どういう風にやっつけていけば…:ということをお話していただきたいのですが…。

○後藤 不登校をしていると、兄弟の間はいろいろ出てきます。つまり、下の子が「ずるい」という気持ちの中には、結局、樂をしているという意味で、その子にとって「学校はつらい」という意識が

とてもあると思うんですね。それを抜けられるお兄ちゃんは「ずるい」というのか、それは一つの訴えだと思います。

それと、子どもが割りと学校の中でうまくやっていると、兄弟でも理解できないんですね。

やはりそういう子がいても、それはその子の考え方になるので、基本的にどうすればいいかというところ、親がしっかり子どもを味方であるということがわかれば、兄弟の関係ってすごくよくなっていくと思います。

親が学校に行っていないことを認めていることは一見よく見えますけれども、認めているというのは、ただその状態を承知していることだけであって、理解していることはまた別の話なんですね。ですから、「この子は行かないけど、しょうがないわ」という裏には、ほかの子はちゃんと行ってほしいという裏返しのような気持ちがあるんですね。そうじゃなくて、兄弟が何人いようと、一人の子が学校に行かないということを親が認めることは、どの子が行かなくても認めるという気持ちがあれば、それは子どもへの心にはピンピン返ってきますので、親はああ言っているけど、気持ちの中では否定しているという現れじゃないかと、経験上は思うんです。

だから、きついと思うけど、もう一步親が考えないと、子どもとの関係は悪くなるというところはあります。

○内山 いかげんでしょうか。ほかのシンポジストの方で今のところにかかわって何かご発言はございませんか。よろしいでしょうか。では、武田先生。

○武田 さっき、役所とか会社とか警察が学校化していると言ったんですけど、特に日本の企業本位社会の中でそれを圧倒的に支えているのは家庭だと思えますよ。これは石川さんなんか言わせると、特に六〇年代以降の母親の合言葉は「速く、きちんと、ちゃんと」、これを子どもに繰り返してき

たというわけですよ。これは何かといったら産業社会の論理ですね。つまり、家庭というものが完全に会社、企業社会というものを支える部品になっちゃっているわけですよ。したがって、学校へ行くことはもう当たり前のことで、さつき、学校に行かないことは悪いことだという言葉とか、觀念があるというお話があったわけですけども、教師もそれからもちろん抜けられないし、親がもつと抜けられないというケースがあるわけですね。家庭が学校化しちゃったらば、もう子どもは居場所がなくなるわけですね。

ですから、仮に教師が学校化していても教師はしようがないんです、教師の頭はなかなか変わらな
いと思っ
ていますから。親が学校化していなければ家にはいられるわけですね。

今、家庭が「速く、きちんと、ちゃんと」とか、そういうあれがなければいられるというんじやないでしょうけれども、いられるというお話があったんですけども、先ほどのお母さんと後藤さんの話なんかを聞いていてまた感じたんですけども、不登校というのは、うちは不登校の息子が二人いるんです。もう八年目と六年目になるんですけども、この八年いろんな思いがあつたんですけど、最近になってなんです。この一、二年なんですけども、長男に対しても、次男に対しても、学校に行っている子から脅迫みたいな電話がこのところあるんです。

それは何かといいますと、うちの子たちは、上の子も中学三年間全く一回も行かないで卒業をさせてもらったんです。下の子も中学二年で一日も行かないで今現在いるんですけども、結局ずるいということを言ってきたんです。上の子のときは、「クラスみんなでいます」と言っ
て、私と話をしたんです。電話の向こうに五人か十人かわからないんですけども、本当にそのぐら
いの子どもたちがいるわけです。「クラスみんな
で今電話しています。息子さんと何しろ話をしたい。僕たちは本当に一生懸命学校に来ているのに、学校に全然来ないで卒業してどう
いう気持ちなのか知りたい」とか、本当に

脅迫的なそんな感じだったんです。私は、いまだにこのことは息子二人には言っていないので、私人の胸と、あとは学校の先生にはすぐ言いに行きました。だから、不登校というのはすぐその不登校の子の問題にするんですね。不登校の子と親の問題とか、だけど、そうじゃなくて学校に行っている子も問題だと私は思うんです。

不登校の子がすごくいろんな思いをして、うちの子もいたわけです、今まで。それはなぜかと言ったら、人の目とかいうのもあったんでしょう。また、最近不登校が多いんですけども、学校に今行っている子たちも不登校というものをすごく恐れていると思うんですよ。「あんな子になりたくない」とか、そういう子たちが不登校になったときにすごくつらい思いをするんです。そして私も中学の先生に、この二年の間に脅迫みたいな電話が何回か続いているものなんですからお話をしたんです。

それは何かというと、「義務教育」の正しい知識ですね。それは私たちがみたくに不登校の親になって初めて知るんですけども、それを学校に行っている子に、入学式の日には校長先生が「義務教育」という言葉の意味を、親と子どもにちゃんと説明してほしいと、私は学校の先生に今言っているんです。そうすれば、「不登校の子はずるい」とかいう言葉は、こんな脅迫電話なんかしてくることはないんじゃないかなって、最近、この一二年の傾向でこういうことがあったことをお知らせしたいと思いません。

○内山 どうもありがとうございました。

今と同じような体験というのは結構お持ちの方がいらつしやるんじゃないかと思いますが、ほかに同じようなご発言をされる方はいらつしやいますか。どうぞ。

○小田原から来ました。今の発言でちよつと発言をさせていただきたくなりました。

今の脅迫をするというのは大変問題はあるんですけども、先ほどから話が出ているように、多分

その子たちも耐えてきたんじゃないかなと。そのはけ口をどこかに求めたいところがあるんじゃないか。だから、不登校の問題は学校というよりも、学校教育というものだと思うんです。勉強もしていないのにこんなことを言うのは何ですけれども、私は、不登校というのは落ちこぼれとか、この問題が出始めたころ、いつもいじめられるのは現場かなと思うんです。私も教員をやって今年生を教えているんですが、私らの子どもころののんびりやってくれたいい先生、一緒に遊んでくれた先生はだめだということで、落ちこぼれをなくして、わかりやすい授業をやって、みんなを高校に送って、微分積分なり、何なりという高校教育をやるんだという形になってからおかしくなってきたなという気がするんですね。

高校はあってもいいんですけども、私なんかの考え方としては、高校なんかになったら本当に自分に合うもの、好きものをやらせていったら楽しい学校になるんじゃないかなと思うんです。高校は変わらずに、小学校、中学校の義務教育の中でみんなに勉強を教えて、みんなに勉強をわかっってもらってなんていうことの要求が高くなってきて、現場の先生も勉強を一生懸命教えなきゃいけない。

そんな中で、私も現場にいますけれども、それにどうしてもついてこれない子というのはいるんじゃないか。周りに学校の先生がいますけれども、小学校、中学校、みんなまじめだと思っんですよ。その中でだんだんおかしくなっているということ、どっちがいいとかって私は言いたくないんです。言いたくないんですけれども、やはり学校の現場にいると、お父さん、お母さん方からの学校に対する、先生に対する期待というのを非常に負担に感じるときがあります。

つい最近も、土・日・月・火と学校を休む。すると連絡帳で「土曜日から火曜日までの勉強の時間を教えてくれ」と。今度水曜日に来るときの時間割を教えてくれというならまだいいんですけども、「土曜日と月曜日と火曜日どこまで勉強が進むか連絡帳に書いてくれ、そこまでやらせるから」

って。私もいいかげんな先生だから、どこまでいくか、その授業をやるかどうかもわからないし、「わからない」と書いたんですけど、そんな中で、今の子どもたちを親御さんから守るといふ感じが、それは笑い話なんですけど、「そんなに気にして、おまえはどこに行くんだ」と言ったら、「スキーに行く」と言うから、「ばかやろう」と思ったんですが。だから、結局この問題は学校の先生のあり方とか何とかということもそうですけども、先ほどから話が出ている、もつと大きいものとしてとらえないと、本当に解決するには至らないと本当に思います。

それと、後藤さんのあさおの会が、親同士でということがちょっと残念だなと思ったんですけども、教員の中でも親である人が大半ですから、親としての立場の話もできますので、一緒に立場で子どもたちのことを考えていきたいなと、私は思います。

○内山 きょうのテーマに沿って提案みたいなことも含まれていると思います。他の方どうぞ。

○立場というのにこだわりたくないと思ってる者なんですけれども、私も親の会にかかわっておりますので、ちょっと発言したいと思えます。

親ばかりが話しているので気になつて発言しないようにとは思つたんですが、私も今の方のご発言と全く同じで、一人の人というのはいろんな場で生きていて、いろんな側面を持っているから、一つの立場に限定して考えるのはおかしいと本当に思います。今、不登校の子どもを持った親は苦しいという話がいっぱい出ますけれども、まず一番苦しいのは当事者の子どもであると思えます。また、苦しい親の中でも、一番苦しいのはきつと教師をしていらして自分の子どもが行かなくなっちゃった方かなと思えます。そして、そういう方はたくさんいらっしゃるんですね。そのことを職場で話せる方もいらっしゃるけれども、話せないとおっしゃる方がこれまたすごく多いという現状なんです。私のかかわっている親の会は、別に資格がそういう子どもを持つている親と全然限定しておりませ

んで、近所の小学校の先生がたまにふらつとやってきて、「今こうでつらいのよね」ということを言っていてくださってすごくうれしかったこともありまして、教師をして子どもが不登校の親もいますし、カウンセラーとか、そういう心理の關係の仕事をしている方もおりますし、いろんな方が集まっていろんなことを考え合っていていく。そういうようなことをしております。

後藤さんがさつきおっしゃった、親だけで本当に安心して話したいのよという時期とか、人とかいうのももちろんあるだろうけれども、会全体としてはそうじゃない形でやっているところもたくさんありますし、先ほどピラをいただきました催しなんかもそういう感じで、先生方といろんな人が寄り集まってやっていいなと思っておりました。

親がそのような場を持っているのに対して、私たち子どもに「あなた、何年生？」って聞きますよね。年なんか聞かないで、「何年生？」で済ませちゃう。それってすごくおかしいということに、私の子どもが行かなくなつて初めて気づかされたんですね。だから、どうして子どもは学校に行くもんだと決まっちゃつて、「何年生？」としかくくられないのかなつて。

そういうわけなので、いろんな人がいて当たり前。だから、子どもだつて、その学校にいやな子がいても当たり前、いろんなところで生きていて当たり前というふうに、何かかわいそうな、挫折した子を温かく見守つてやりましょうという観点はもう外して、いろんな子がいるんだというところでやっていきたいなと思っております。

○内山 どうもありがとうございます。具体的な活動のことも含めたお話をしてくださつたと思います。次の方、どうぞ。

○ 実は、チラシを配っていただこうと思つて、チラシを置きに来て、それで時間をタイミングを逸しまして、そのまま会場に残つちやつて話を聞いている者なんですけども。私自身は横浜の市役所に

勤めていて、そういう意味では学校化された官僚でもあるわけなんですけども。さつき永田先生のお話の中で、アメリカに行っていらっしやった娘さんが漫画家になりたい。「でも、大変だね」と言ったときに、「何でそんなことを言うの。私の人生じゃない」と言ってきたというのは、すごく私は印象的だったなと思いつながら。あと学校の先生で小田原の方で、学校の先生も大変みたいな話があつて、私や役所にいますから、非常に期待されて、何か仕事以外のことをさせられているところはずごくあると思うんですね。

つまり、私の仕事で言うと、寿町つてありまして、日雇い労働者の町なんですけども、その福祉事務所の受付みたいな仕事をしていまして、多勢今況で来ていますね。例えば五階にそのお客さんらしい人が来ているからちよつと来てくれみたいな話があるんです。福祉事務所の五階は総務があります、総務から福祉事務所の方に電話がかかつて、福祉事務所の職員が駆けついたりなんかという話があるので——言いたいことはわかります？

というのは、お客さんですから、胸にバッジがあるわけでもありませんから、その人が対応すればいいわけですね。「この席に座つてもらうとちよつと困る」とかですね。でも、福祉事務所の職員は私たちの仕事だみたいな形で行かなくちゃいけないみたいな、そういうふうな関係のない仕事をさせられちゃつて、多分「進路と自立を拓く」と言つたときも、「将来、漫画家じゃ大変だね」と言わなくちゃいけないような、仕事のプラスアルファみたいなのがあるんじゃないかと思うんですね。その辺を個人の熱意とか、見方だけじゃなくて、どういう仕組みに日本はなっているんだろうということを考えなきゃいけないんじゃないかなと思うんです。

私の子どもが通っている小学校は、ことしは百年なんです。横浜の鶴見なんですけれども、「百年祭」をやらなくちゃいけないということで、チラシを見てもよくわからないんですけども、実行委員

会方式でつくるんだけど、学校が主体でもなければ、PTAが主体でもなくて、両方がどこかで連携したような実行委員会ができて、「百年祭」をやっていくという話らしいんです。どういう脈絡で出てきたのか、どうやってその実行委員会を組織していくのか、よくわからないんです。手続的にもおかしいんですけども、私が授業参観に行つて、副校長先生なんか話すには、「これから実行委員会ができるので、皆さんも無理をせず頑張つて、そしてすばらしい『百年祭』にしていきましよう」という話なんです。これはほとんど理解できない話なんです。つまり、主体がはっきりしないんだけど、副校長先生が呼びかけて「無理をしないで頑張つて、そしてみんなで盛大なお祝いしましょう」と結びついていく道筋みたいなのに、子どもも頑張り、教師も頑張つていくんだけども、仕組みがはっきりしない。はっきりしないけども、適応しなくちゃいけないところに矛盾があるといった、この仕組みをもう少ししっかり見据えていきながら、武田さんの話しているような「非学校化」というのは、どこにそれと重なるのかみたいなものを学んでいきたいし、ちよつとコメントがあればただければと思っております。

○内山 なかなか難しい問題も含まれていますけれども、武田さん、ちよつとご意見を。

○武田 今の話と結びつくかわからないんですけども、先ほどの小田原の先生の話に関連して言うと、おっしゃることは、私はとてもよくわかるんです。特に七〇年前後から、私が教師になったころからそうなんですけれども、「金八先生」というのがありまして、おかしいな、おかしいなと思いつながら金八をやらざるを得ない状況があったんですね。私は、今の学校をだめにした責任者の一つは金八であり、マスメディアだと思つてはいますね。

なぜかというと、マスメディアのそれこそ記者とか、番組の制作者はみんな学校化社会のエリートなんです。官僚もそうですけれどもね。教師もそうです。大学まで出ちゃっている。出ちゃったん

です。まあ、マスメディアは少し教育に対する論調が変わってきたなと思っております。この山本哲士さんの文章の中で、「学校で過ごす時間が長ければ長いほど、学歴が高ければ高いほど人間は賢くなるのではなく愚かになっていきます」と書いてあるんですね。私はこれを最初に読んだときにある種の比喩だと思ったんです。だけど、そうじゃないんです。非常にストレートに言っていると思います。ということ、我々は理解をしていく必要がある。そこまで自分の営みを、特に教師は相対化できないと、例えば今おっしゃられたことなんかにも対応ができていかないんじゃないかと思うんです。

ただ、そのことは教師だけの問題じゃないよという意味で、まず会社がそうだし、病院もそうだしと私が言ったのは、実は数年前から、横浜の地球屋という登校拒否の子どものたまり場で、私はイリイチの読書会をやってきました。関連で、石川憲彦さんとか、佐々木賢さんとか、山下英三郎さんという方を呼んで講演会をやってきました。私自身もシンポジウムに参加したときに、子どもが学校に行っていないあるお父さんが、「我々は会社で一生懸命やっているのに学校では何をやっているんだ」と言うんです。学校で相当トラブった方なんです。そういう話をされたんです。私は「そうではなくて、学校もそうなっちゃっているし、子どももそうなっちゃっている」という一つの原因は、お父さんがおっしゃっているような会社の能率主義とか、効率主義とかいうものに耐え切れなくなってきたということじゃありませんか」と問い返しをしたんです。

ですから、私はそういう意味では、先ほどの先生がおっしゃったように、日本の社会の中の至るところで、それぞれの場所での課題として考えていかなないと、学校改革とか、教育改革とかいう話があったんですけれども、今はものすごい勢いで進行しつつある学校の改革は決している方向に向かっていない。単位制高校が神奈川県の場合にうまくいきそうもない話もあるんですけれども、私はうまく

いきそうもなくてよかったと思っています。単位制高校はちつとも問題解決にならないわけですから、そういう視点を我々自身がいろんなところで持っていけないとだめだと思っています。

○内山 どうもありがとうございました。

時間が大分過ぎてしましまして、あと少しの時間になってしまったんですが、ここでシンポジストの方の中で、永田先生、今までのフロアとの対話なんかも交えてご感想なり、ご意見なりをいただきたいと思います。

○永田 さっきの友だちから脅迫の電話が入るということ、その辺のことに似たことはかなりこのごろ耳にするわけです。きょうは神奈川県教育文化研究所が主催しておりますけれども、横浜市教育局文化研究所というところもありまして、その調査でも学校が楽しくないという子どもがほぼ半数を占めています。そういう実情に立って、学校って今何をしているのかということになります。つまり、学校は学んでいくところにはなっていない。お勉強はしていますけども、お勉強ということと学ぶことは違って、学んでいったら、家で学ぼうが、社会で学ぼうが、学校で学ぼうが、そのことによつてよかったなと思えることがあるはずなんですけれども、そういうふうには子どもたちはなっていない。

それはどこから起こっているかといったら、テレビドラマでいうと、ちょっと前では「ご入学」で、今は「お受験」ですね。若いお母さんたちの意識が、今どんどんそこへ流れていっている。私は、子どもが一つの人生を全うしていくことは何を身につけて、何を学んでいったらいいのかということ、学校のカリキュラムだけじゃなくて、本当に子どもが生まれたときからのことを考えてみたい。学んでいないためにお母さんたちが育児をどうしたらいいかわからなくて、あっちこっちに電話をかけまくったり、マニュアルを求めて余計まずくしている。そういうためにアトピー性の皮膚炎がふえたりとか、いっぱいそんなことがあって、それをまたどうしたらいいかというので、またマニュアルを求

める。

私たちは、人が生きていく中で自然に学んでいくこと、あるいは人から人へ肌で伝わって学んでいくこと、そういう社会をつくるのが、武田先生が言われている「非学校化の社会」ということを考えていくことなんだろう。そういうことで、今、自分が当面している子ども、学校、教室、家庭ということだけのことじゃなくてやっていきたい。

そのために学校の先生は、学校をもつと楽にしましょう。仕事が多過ぎます。しよい込み過ぎています。私はやめちゃってから、いつもこういうふうに言うんです。やっているとときは自分もやっていたんですけども、でも、本当に手を抜くところはしっかり手を抜いて、子どもと遊ぶことから始めていかなないと、もつと大変なことになる。

公務員は、簡単には首にならないと思います。どんなに親からの注文がうるさいと思われても、話し合っていくましよう。そういうことから始めていかなきゃならないことを思っつて、不登校の原因がどうか、どうあつたらいいかということは、もう少し根底から一緒に考えていきたいと思っつています。

○内山 どうもありがとうございました。坂木先生、何かありますか。

○坂木 今、二年生を持つているんですけど、最初のころから子どもたちには「学校というのは行かなくてもいいんだよ」なんていう話をしていられるんですけども、まだわからないからキョトンとしていられるんですね。子どもたちに聞くと、学校に行かなきゃいけないと感じている部分というのがたくさんあるんですよ。でも習い事をしている子もいれば、三年ぐらいで塾に行く子もいて、学校以上に勉強を教えるところはたくさんあるんですね。僕はもう四年目なんですけども、やっつていて、最近の学校は勉強を教えること以上に何かもつといろんなことをやらないきゃいけないんじゃないかなと思っ

ています。勉強はどこでもできるし、自分だつて一人でできちゃつた。じゃ、四十人ぐらいいる中であつ何ができるのかといつたら、人間関係みたいなところが大事な。いろんな子がいて、悪さをする子もいれば、すぐ授業中にふざけちゃう子もいるし、まじめな子もいれば、人前ではなかなかしゃべれない子もいる。それはそれでその子のいいところなんだよというところが、お互いにわかる場として、これだけいろんな子がいるというところで学んでいくのが、一番今の子どもたちにとって大事なんじゃないかなと思つて、そういうことをいつも心がけてやつていっているんです。でも、今、永田先生が言つたように、学校はすごく忙しいです。授業が終わつたらすぐ会議、すぐ仕事という感じで、子どもとなかなか接する機会がなくなつてきています。

話をしようとして、くだけた感じで話せば、ちよつと年を取つた先生からは、「あの先生が受け持つてから言葉遣いが悪くなつちやつたんじゃないか」とか、「先生のことを呼び捨てにしてすごく失礼だ」「先生ならもつと先生らしくしなくちゃいけないんじゃないか」と言われたりもしながら、その辺は「はあ、はあ」と言いながら、最近には気にせずにはやつてはいるんです。だから、「あの先生の前ではそういうふうには言わないで、一応先生と呼んでね」なんて言つたりとかしてはいるんですけども、あとほかの先生から、僕のこういう話をたまにしたときに、「学校の先生は教育相談とは違うから、授業が大事だから授業をしつかりやらなきゃいけない。指導しなきゃいけないんだよ」と言われたことがあるんですね。「でも、相談的というか、子どももの身になつて考えることもできるんじゃないかと思つて、今考えてやつているんですよ」と言つたら、「でも、長い期間、先生というのはつき合えないんだよ」と言われたんです。「三年間持つたら三年間の間は一生懸命やるけども、卒業してまで君はその子のめんどうを見られるか」と言われたんです。「その子が中学生になつて、高校生になつてまで、その子の本当の身になつて、その子のことを考えてできるか。でも、そのときには自分のクラスの子を持つているん

だからできないんじゃないの。だから、それは少し分けて考えなきゃいけないじゃないか」というふうに言われたりします。でも、そのところのもっと接点みたいなものが自分の中で見つけられればいいなと思って、それが本当の子どもの自立とか、進路ということで、教師の立場として考えていくところでも少し考えていきたいな。でも、それがどういふことなのかというのはまだ自分の中の課題なので、はっきりしたことがわからないんですけども、やってみたいなという気持ちで、これからも頑張っていきたいと思っています。

○内山 現場の小学校の教師として、これからの希望みたいなものを語っていただけだと思います。時間が参りました。

「不登校をめぐる」ではなくて、未来の子どもたち全部に向かって、「進路と自立を拓く」ということで、きょうのシンポジウムが皆さんとともに歩むための何らかの糧になればという感じで終わらせていただきたいと思います。

ご協力大変ありがとうございました。(拍手)

事務連絡

○司会 今しばらく時間をください。

きょう、受付で渡した資料の中に感想記入用紙があります。それを書きながら私の事務局からの連絡を聞いてください。

毎回私どもシンポジウム記録集をつくって、学校の関係職員、それから親の会の皆さんに配布して

いますけれども、必ず皆さんのご意見も冊子に入れるようにしております。ですから、感想の記入をひとつよろしく願います。

また、前回の不登校のシンポジウム記録集と、その他、うちの研究所の関係冊子を会場を出た左側のところで安く販売しておりますので、帰りにちよつと立ち寄ってみてください。

それと、きょう、何か資料をお渡ししなきゃと思ったのですが、そのレンジユメの裏に、定時制とか通信の高校の状況が書いてあります。これは私が去年の今ごろ親の会のある例会に出たときに、みなさん定時制や通信の情報が知りたいということで、うちの子も入れるのか、どんなところなんだという質問がかなりありましたので、お役に立てればということで、行かなければいけないということとじゃなくて、一つの参考になればということでのせております。その辺はご理解してほしいと思います。

それでは、最後になりますけども、研究所の小中副所長の方から閉会の言葉を申し上げます。

閉会の言葉

○小中儀隆副所長 土曜日の午後、大変貴重な時間に本日はお集まりをいただきまして、本当にありがとうございます。

この研究所のシンポジウムもきょうで五回目となりました。一つは、不登校の問題、もう一つは高校入試制度等と高校教育の問題等を取り上げて開催をしてみました。県内各地で開催をしているわけですけども、いつも大変大勢の方々においてをいただきまして、感謝を申し上げます。



きょうのテーマもなかなかすぐには解決できる問題ではない
と思いますけれども、どの子にもこういったことが起こり得る
可能性があるということ言えば、今までただ特異な例として
見られていたわけですけれども、そうではないということ。こ
の不登校に対するとらえ方、あるいは考え方、見方というものも
いろいろ変わってきているのではないかなと思います。こうい
った問題を考える一つのきっかけになっていただければと、こ
んなふうに思っています。

また、いずれかの機会にこういったシンポジウムを開催した
いと、このように思っておりますので、お近くで開催されたと
きには、またぜひご参加をいただければと思います。きょうは
本当に長時間にわたりましたありがとうございます。

以上をもちまして、本日のシンポジウムを閉会とさせていただきます。
（拍手）

—閉会—

参
加
者
感
想
文

☒ 不登校をめぐるのシンポジウムも内容が少しずつ変わってきていると思いました。「不登校とは何か」とか「そういう子供たちと共に生きるとはどういうことか」という視点から、不登校の子供たちが示している社会のひずみや問題点は、どの子の上にもおおっている影。これをどうするかという方向に変わってきているように感じました。登校していても、生きる力の弱い子、流されている子、無気力で人との関わりを持ってない子がとても多いのです。登校を拒否する感受性とエネルギー不足から登校している子もいると思うと、今日の社会が子供の本源的エネルギーをつぶしていると思わざるを得ません。「自立をめざす」これはすべての子にとっての課題です。

☒ ずい分考え方が変化したような気がします。このような話をもっとPTAの家庭教育学級などできけたら、もつといろいろな親も教師も成長できると思います。

☒ 『義務』教育とは…。

「義務」でないのなら、不登校も特異な例ではなくなり、何ら問題もなくなる。しかし、現実には多々問題があり、今日、このようなシンポジウムが実施されている。本当に、義務教育でないと言えるのだろうか。

☒ 「不登校」の問題はとても難しいと思います。子供側には様々な原因や理由があり、対応する教師側にも様々な対応の仕方があり、本人を取り巻く環境も様々なので、すべての状況が適切であれば良い結果が出るだろうし、その逆もあるだろうし、子供にとっても教師にとっても親や周りの人間にとっても大変難しい問題だと思えます。

今回のシンポジウムでは、カウンセラー、登校拒否経験者、その父母代表等、経験をもとに話されたので、訴えるものとか説得力があり、とても参考になりました。

☒ 不登校の講演会のテーマに「不登校問題を：」「なぜ学校に行かないの：？」という表題を目にする。今日のシンポジウムに参加し、自分自身を含め世の中の多くの人の認識として、学校は行くべき所という認識を前提としていることに改めて気付いた。同時に、小・中・高・大で行なわれている教育内容と教育方法は、人間の育ちにとってどんな意味を持つのか、一つ一つ問い直していく必要を痛感した。各シンピジストの提言を聞いてみると、不登校を考えていくと、日本の教育がかかえている矛盾が浮きぼりにされるのだと気づかされた。

☒ 日頃モヤモヤとしていたものが、本日のシンポジウムでは少しはれてきたように思います。

社会全体を改革していくことが、学校改革とともにされていかなければ、子供たちのすこやかな成長が望めない。微力ではありますが、改革に少しでもかかわっていければ：と思います。

☒ 今まで数回他の講演会に参加いたしました。今回は居眠りすることなく、最後まで興味深く拝聴することができました。お話の内容は、親の立場、先生の立場、いろいろな角度からのお話を伺うことができ、この問題の奥深さを感じました。とてもよくまとまって話が進められよかったです。思います。

☒ 不登校の子供と登校している子供たちを取りまく学校教育、また家庭教育の問題を、もつと深く考えなければならぬなあーと思いました。

☒ 「進路と自立を拓く」ということで話されて勉強になりました。特に、学校制度が変わって社会が変わらなくては、今の体制では無理がある。すぐに解決できる問題ではないが、社会が変わらなくてはいけないと感じました。

- ☒ 秦野から「不登校」というテーマに吸い寄せられるようにしてやってきました。不登校児にスポットを当てるだけでなく、各方面の方の考えを聞くことができ有意義でした。
- ☒ 会場が狭いのか、それとも参加者が多いのか、それはいずれかとは思いますが、パネラーの顔がよく見える会場ですとさらによかったです。
- ☒ いろんな方の意見とても参考になりました。明日から新たな気持ちで仕事にがんばりたいと思います。何かの機会に学校に持ち帰って話していきたいと思います。
- ☒ いろいろな立場の人たちの話が聞きたいへんよかったです。子供たちの身になって力になれる大人がふえることを期待したいと思いました。その人の立場立場にたって子供に出来ることがあるはずです…。
- ☒ 日ごろ感じていることが、いろいろな立場の方の話の中にもでてきて、やはり同じことを感じている方が多いと意を強くしました。母親が成績成績とばかり考えがいつているので、子ども同士の間関係がわるくなる原因だと思いました。
- ☒ 教師、親の会、その他いろいろな方との討論が出来たことは有意義であった。大きな社会の中で知らず知らずのうちに企業がのぞむ人間像に近づけられているという感が強い。もっとしつかりつめて子育てをしていかねばと思った。
- ☒ 自分の知らないいろいろなお話がきけて大変良かったです。マラソンの話、教科書の話、本当に知らないことばかりです。勉強になりました。
- ☒ 不登校の問題は、今日の話聞いて、学校、家庭、できれば行政など、トータルな面で考え、解決していかなければならないと思った。
- ☒ 体験談については、大変参考になりました。また、シンポジストの方がそれぞれの立場で話され

たことも大変よかったですと思います。参加してよい勉強になりました。

☒ いろんな人の話がきけてとても良かった。いろいろな子が受け入れられるよう学校と自分自身の心を風通しよくしたいと思う。次の機会にも参加したい。パネリストの人数を減らすか一人一人のお話を少し短めにしていたら、意見交換の時間が多いとよかった。休憩のないのはつらかった。学校から食事もとらず来たので。でも昼食ぬきでも来て本当に良かったです。

☒ こうした教育シンポジウムへの参加は初めてで、何となく「不登校」ということばにひかれて参加してみた。こうした問題をかかえた家庭、教育現場の真剣さ、現実におどろかされた。私も子供の気持ち、社会情勢を考えながら、取り組んでみようと思う。

☒ あっという間の二時間三十分でした。ここでの話をもっと自然に広げていくことだと思います。みんな楽になるはずです。不登校は、行かないのではなく行けないのです。行ける学校、楽しい学校を作りたいです。

☒ テーマを見た時、プログラムの裏の数字を見た時、武田さんがはじめていったことのように、ハウツー的なものになりそうと思ったのが、そうではなく、とてもよかったと思いました。根本的な伝え方が大切だと思います。ただ教師の発言が少なかったので、教師の本音はどうかと気になります。

☒ 本日の教育シンポジウムの感想として、神奈川県が進めた高校百校計画が果たして良かったのかどうか疑問に思うようになった。数が多くなっても中身が変わらなければ、退学する生徒が増大するのは当たり前のような気がする。高校教育、中学教育、不登校生徒にどう対応していくのか、学校側の対策が出されなかったようである。専門のカウンセラーの各校配置等、具体的な話し合いを期待していたので残念である。次回に期待したい。

☒ 不登校の子を受け持った学校や担任は、「学校はおもしろくない」「先生はひどい」「むりやり連れていく権利があるのか」「やりたくないことをなせやらなければいけないのか」等々を、本人や親から思われ、非道なことをしているように決めつけられる。一方、集団社会としての学校と一人一人の人権尊重の間に立たされた教師は、朝も夜もその仕事に時間も心も使っている。ノイローゼ気味になりそうになっている教師がいることもある。

好きな時期に望み通りのことをしたいという権利には、一人の教師や何百人の他の子どもをかかえている学校では、満足な対応は不可能です。満足な対応を、一人の教師が四十人四十通りでできますか。最終的には本人と親でしょう。家庭と連絡を取ったり、登校している三十九人に不登校の子の人権を受けとめ、認めるよう指導している担任に対して「この人は信用できない」等、マイナスの態度しか見せられない人たちは、教師という一人の人間の人権をふみにじっていることにならないのですか。その上で、卒業という肩書きだけを欲しいのですか。自信を持って「自学独学です」と言えばよいでしょう。子どもの人権の名のもとに、精神的に迫害されたり、体をこわしたり、家庭生活にまでしわ寄せが来ている教員が増えていることも、合わせて課題にあげてほしいです。

☒ 私は、過去二年間の冊子を学校で入手し、読み、この会に関心を持ちました。たまたま近くに会場が設定されていたので、渡りに船という感じで参加した次第です。やはり生の声を聞き、刺激され、また、最近の私の教師生活の中で、知らないうちにはまりこんでいた管理的な子どもに対する態度に、はずかしいくらいの気持ちを持ちました。明日からの教育に、今日のシンポジウムを生かしたらと思っています。「学校で過ごす時間が長ければ……」の一節が心に残りました。「学校」を改めて考えてみようと思います。

☒ 現在、定時制高校の教員をしているものですが、いわゆる中学時代の不登校児がかなり入学して

きます。学校の環境が大きく変化するせいか、中学時代欠席率五〇%の生徒が、皆勤賞をとるくらいになります。ただ、やはり不登校のまま入学式から一度も登校せずにやめていく生徒もおります。不登校が何故起こるのか、原因不明（いいかえれば原因はいたるところにある）である現在、本日のシンポジウムはなかなか意義のあるものでした。

武田先生の話には、とても共感できるものがありました。

☒ 今の学校がかかえている問題を解決していくことは、むずかしいことだと思いました。

いろいろな期待、要請にこたえなければならぬ、文部省、指導要録、その他の制約、社会、企業、親からの期待……。そういう中であえいでいる学校が、子どもたちを息苦しくさせてしまっている……。学校へ来ている子どもたちの意識をゆがめてしまっているものと同じ根っこをもっているように思います。学校を本場の学びの場にしたい。「お勉強」ではなくて……。また、実際に不登校になっている子とどうかかわっていけるかも、今ひとつ悩んでいます。

☒ 「不登校児へのメッセージ」と考えると、本日のような流れ考え方になると思います。ある面で学校の体質は保守的で、変革を必要とはしていますが、全体的に学校に働く教師が力をぬきすぎないことも気にかけたと思います。バランス感のある中で、若い教師のカラーが入り、学校の雰囲気は変わりつつあります。進歩することは、若干の変化でもあります。不登校児にとって、学校が「居心地の良い場所」となるよう努力すべきでしょうか。（一教師として）

☒ 大変勉強になりました。特に、今の高校生の実態を知ってショックを受けると同時に、深刻な状況をどう改革していくべきか、これから自分なりに考えたいと思いました。

中学三年間の学習を半年で学習できた経験は、大変参考になり、明日からクラスの子どもたちにくつたりとかまえて教えていこうと決意しました。

またぜひ「シンポ」に参加したく思います。

☒ 私も小学校時代一、二年の時学校へ行っていませんでした。現在中学校の教員をしています。私の場合、幼児期の過保護と、一、二日学校を休んだ時の対応の極端な差に人間不信になったように思います。

かつて、中学一年では一日も学校にこなかったが、二年になって休まずに登校した生徒を担当しました。私は、その生徒に何のはたらきかけもしませんでした。卒業したあと、その生徒と話をしましたが、「僕は学校に行っているのではなく、友人と遊びに来ているんだと考えようとした」と言っていました。この時以来学校はこんなものでいいのかなと思っています。

☒ 大変参考になり、エキサイティングなシンポジウムでした。不登校をどう考えるか。義務教育とは何か。学校制度への疑問など、私自身小学校の教師でありながら、考えるよい機会となりました。この感想記入用紙を例にとりますと、このような細かい野の間に感想を書けという余計なお世話のご親切がウンザリさせる…。それと同じことが義務教育にもあるのでしょうか。もつと相手を信頼しなくては、子どもを信頼しなくてはいけないと思います。(横浜・小教員)

☒ 学校の先生が「学校に来なくていい」と言えるのか。本日の講演を聞きながら、深く考え込んでしまいました。もし、私が担任をしている子どもたちの中に、不登校の子どもがいた時に、他の子どもたちがいる中で「学校に来なくてもいい」と言う自分のやっていることを否定するようなことを認められるのだろうか。むしろかしいと思います。ただ、話にもあったように、生きてゆく力というところが大切で、学習にとらわれないという考え方が、解決法の一つの糸口かなと思いました。☒ 学校の空洞化がはじまりつつあると感じた。やがて近い将来には学校は解体されるだろうと最近感じつつあるが、それを実感として感じられた。私自身は教師です。

☒ この学校にも不登校の子どもたちがいる。いつも思うのは、どうしてそうなったのか。今、彼らは何を考えているのか。そして、学校というものをどうみているのか。もしかしたら、自分も子どもたちを、知らぬところで、傷つけているのではないか。

大人もかなり悩んでいる社会であるが、子どもたちもかなり悩んでいる。難しく思うと何も言えないが、私はとにかく人間として生きていけるよう、また、いろんな人がいるという認識を持ちながら、大きな問題だと考えている。

☒ 「学校へ楽しく行ける」「学校で楽しく過ごせる」ことは、やはりベターと考えます。鉄棒から友だちとの交流、学習、すべてにわたり学ぶところがとても大きいと思います。友だちと交流なしで過ごす子どものつらさはどれ程でしょう。質より量、特に友だちとの交流ほど児童期に必要なものはないと思います。「友だちとの遊びや活動の中に、社会生活の知恵や責任感・勤勉を学んでいく」と精神学者（エリクソン）も強調しています。全くその通りと思います。私はやはり、子どもには登校を説得します。学校を楽しくするよう心を砕きます。

☒ 「学校を楽ししく」「学校が楽しくない」なぜ学校は楽しくないのか？ 楽しいとはどんなことか？ 週五日制が導入され、学校はますます楽しくないところになってきている。その上、月二回まで可能だと文部省は言っているが、数字（時数）だけ合えばいいものではない。子どもにとって、子どもがのびのび学べるとはどんなことかを全然考えに入れてない指導要領など、意義あるのだろうか。今まで以上に子どもは学校に管理されている。学校制度そのものを論じる社会ができてこない限り、いろいろ言われている学校問題は解決しないと思う。現場における押しつけのきびしさを知ってもらいたいと思う。子どものことはほっといて、上を向いていく教師の多さも問題である。

☒ 子どもたちにとって楽しい学校とはどういうものなのか？ 常にそれを考えていくことを忘れな

いようにしようと思いました。

小三を担任していますが、クラスで「不登校」についての学級会をひらいて話し合ってみたいと思いました。

☒ 「授業は暴力の一種である」というのは大賛成です。「どの子も生き生きと学ぶ」ということがすべての学校の研究の主題についています。生き生きと学ばさなければ無能であるかのように教師が思い込まされ、ひたすらがんばる毎日を反省させられました。

☒ 教師になって二年目です。毎日子供たちと「お勉強」をしているなあと、今日の話聞きながら反省しました。

いろいろな子がいるのに（「個を生かす」などと言いながらも）、先生や大人にとって都合のいい子どもたちにしていったのではないかと思いました。

教育実習生の頃は（たったの一カ月のことですが）とても充実して、とても子どもたちと触れ合っていたなと思います。そんな話を他の先生にすると「だって実習生なんて、子どもたちへの責任なんてないし、クラスをもっているわけではないのだから楽しいのよ」と言われます。自分でも、そんなものかなと思っていたのですが、心のどこかに疑問がありました。いろいろなこと、雑用などの手抜き上手になって、子どもたちとたくさん遊びたいなと思いました。

☒ いろいろな立場からのパネリストの方々だったので、とても参考になりました。ありがとうございました。

余談ですが、僕は不真面目な教師でいいと思っています。真面目に遊んでいる子どもたちのじゃまをしたくない「不真面目」って勇気があるんですね。

☒ 一年生の担任の者です。少々不登校気味の子を持ち、母・児童と共に参加してみたのですが、少

々高校・中学生対象の話に偏り、不安になりながら聞きました。「進路と自立」の「自立」に引かれてきたのですが…。参考になることもありました。ありがとうございます。

☒ 不登校経験者の話はやはり迫力がありますね。親と話す場面がふえてきている最近ですが（中学校養護教諭です）、不登校生徒の心の葛藤がよくわからなかったのですが、少しだけみえたような気がします。周りは「見守る」それだけでよいのではないのでしょうか。

☒ 不登校の経験を持つ先生、ストリートにきた先生より子供の気持ちがよくわかり、よいと思います。子供の気持ちを理解することが、その子の大きな味方となって自立していくと思います。

☒ 小学校に勤めています。このご家庭が学校化していることを感じます。学校以上に、漢字のつめ・ハネの要求、宿題の要求、計算力の要求 e t c. 低学年はもっと遊ぶことが大切だと思うのに、学力への要求はすごいです。でも、子どもは勉強するキカイではないのですよね。すべての子が勉強に向いているわけではないです。ドイツのような職業課程の成立が必要だと思います。

☒ そろそろ学校以外の選択肢がもっと頭をもたげてきてもいいのではないかと感じています。学校を中心にしか考えられない教育は、もはや時代遅れです。と同時に、なぜ学校は楽しくてはいけなところなのでしょう。もっと楽しいところに行きましょう。子どもたちの選択肢の中から外されないうために！

☒ 学校と親、学校と子ども、との距離を改めて感じます。地域連携とかは、いかにことばだけかも身にしみます。子どもが育つことを親も教師も喜べる、そんなあたり前なのが今できないのです。学校に行くと子どものよさがそがれていく。教師はよかれと思ってやっているのでしょうか、毎日帰ってくる子の顔つきをみないと安心できません。（親 and 教員）

☒ とても参考になりました。わが校にも、親の立場で気軽に参加できるところがあれば、ご紹介し

たいなど感じている。不登校気味の子どもをかかえ、悩んでいる保護者がいますので、ぜひ今回のお話を伝えたいと思います。

☒ 教師一年目なのですが、不登校についてのくわしい知識はあまりなく、今日のシンポジウムに参加してとても勉強になりました。ありがとうございました。

☒ お母さん方やいろいろな先生方のお話を伺い、大変勉強になりました。これからの指導に、今日お聞きしたことを役立てたいと思います。

☒ 我が子が登校拒否の経験がある教師です。当時我が子が家において、私は学校で授業をしていて、どうしてこの子たちのように学校に来て生き生きと過ごせないのかと、苦しい思いをしました。帰宅しては我が子を責め、朝になると登校を強いてしまいました。そんな時、養父に電話をしたら「へえつ、すごいなア、あいつは、はうのも立つのも、なんでも遅かったのに、もう登校拒否をするなんて、中学生並みだ！」と感心したのです。そんな見方もあるのかと、ふっと気が軽くなり、子どもへの見方も変わりました。間もなく登校を始めました。

別のことですが、今年長い教員生活で初めて障害児を受け持ち、これまでカリキュラムに子どもを合わせようと必死になってきたのが、障害児には全く通じない。今までの自分のやり方を全部否定することから始めました。今は、その子に合わせて一つ一つカリキュラムを作っていく毎日です。そういう意味で、今の学校教育の持つ「官僚的おそろしさ」をびんびんと感じています。

☒ まず母親、親の立場で子どもが学校に行かなくなった時、とても混乱してしまいました。「まさか我が子が……」という思いで、何とかして学校へ行かせようとあせり、ひっばってたいて、等々、子どもにつらくあたったなど今になって思います。現在、私は学校に勤めており、このようなシンポジウムの参加機会があり、ありがたく思っています。

小学校から引き続き現在中学二年生ですが、不登校中です。しかし、お稽古ごと等、塾にも喜んで行っている子供の様子をみていると、必ずしも学校へ行かなくても、生きる力があれば、何とかしてゆくのだなと思っています。学歴社会は、どうしても頭にチラついていますが、これをふっ切るにはずいぶん時間がかかりました。

☒ 初めてシンポジウムに参加しました。県の教文研に一度息子の不登校について相談に行きました。息子は昨年の九月から不登校になってしまい、辛い日々が続いている最中でした。内山先生や谷口先生のアドバイスを受け、元気が出てきました。子どもにも辛いことを言って苦しめてきましたが、息子の立場に立って考え行動するようになってきました。「学校に行かなくてもいいんだよ」と息子に言えるようになったら、辛いこともなくなりました。「息子の人生は息子が決めるんだ。息子のいい相談役になろう」と、今は夫婦とも考えています。(両親とも教員の共働き家庭)

坂木先生の体験談は、考えさせられる場面がいくつも登場し、とても理解できて、力強く感じる
ことがありました。ありがとうございます。

☒ 不登校の子を持つ一父親ですが、こうしたシンポジウムに初めて参加させてもらいましたが、大変参考になるご意見を聞かせていただき、私にとりましては意義深いものでした。
特に、ご自分の体験をもって述べられる領域のお話は、非常に参考になります。

また、今後出来ればもう少し長く時間がとれ、参加者との話し合いの時間がほしかったと思います。
す。今後ともこうした企画を続けていってくださるよう心からお願い致します。

☒ 昨年七月から学校に行かなくなった中二の息子がいます。今はとにかく、家が自分の居場所として快い所にして行こうと努力しています。やっと最近「どこかフリースクールのような所に行こうかな」と本人が言い出したところです。今まで、県の機関というとおかしい先生の立場からアドバ

イスするのではと、少し嫌っていたところがありました。今回の先生のお話を聞いて、電話で相談してアドバイスを頂こうという気持ちになりました。その折りはよろしくお願いします。

☒ 中二の男の子が、中一の三学期から行ったり行かなかったりということを続け、おこつたりはげましたりなど、色々と手をつくして学校へもどそうとしましたが、中二の三学期から全く登校しなくなり、学校について考え、講演会、カウンセラー等受けましたが、今日の話で、うわべだけの理解をしていたことに気づきました。登校拒否なんて、子供のうち一人だけでたくさんだという気持ちで下の子を追いつめていたとは…。もっと自分の心も開放（学校化より）しなければ、と感じました。

☒ 不登校の親ですが、今日のシンポジウムに出席して、シンポジストの方たちが、学校にもどるべき、学校に行くことがベストと考えていらつしやらないので、ホッとしました。

四年の女の子と、中一の男の子二人とも学校へ行っていない。上の子は、どちらかという学校を拒否していると思っていますが、下の子は二年近くたった今もまだ学校にこだわっています。親は二人とも学校にもどることを望んでいません。にもかかわらず、下の子はこだわり続けています。今は母親を強く求めているのに、こういった所へ来るのも大変です。「学校に行かなくてもいいんだよ」と言ってくれる坂木先生のような方がもっと増えてくれると、子どもたちはもっと楽になると思います。

親としても、まわりの人たちにこういう状況を認めてもらおうと思つていますが、どういふかたちで、どのようにやっていけばいいのか、考えさせられる毎日です。

☒ たいへん参考になりました。我が家の三女は三年間登校拒否を続けておりますが、自信を持って、学ばせていきます。

原因の追求は、あまり意味がないように思います。登校拒否の子供たちがどういった道を行ったかを、数多く知りたいと思います。

☒ 親としての意識改革をしていかなければならないと思いました。子供が登校拒否になって始めて、自分の生き方に問いかけができるようになりました。いい機会にしていきたいと思います。

☒ 初めて参加しました。たくさんの有意義なお話を聞くことができとてもよかったです。気長に、不登校の子供のことを（弟妹も含め）考えながら、暮らしていこうと思います。

☒ 永田先生の体験談、坂木先生自身の不登校になった生徒の気持ち等大変参考になった。教育に携わる者として、様々な体験をもつてそこを切り抜けてきた体験をもとに指導するということは、大変価値があるのではないだろうか。友人にも、中学の時つっぱりをやり当時一日中弁当を持ってパチンコ店に行っていたという先生がいるが、いろいろ問題をもつた子どもたちにもしたわれ、よき理解者として教育に携わっていた。私も中学生を教えていた時（現小学校）非行の生徒たちに接することにより、今まで小学校で教えていた時の感覚がまちがっていたことに気づくことがあった。

☒ ただ、私自身両親がいない状態の中で育つたため、どこか性格的に問題があるかなと思うことがあり、そういうことが周囲との協調性に問題が出てくるかも知れない。自己を知り、それが子ども的人格形成に問題があるというものについて認識しておく必要があるかも知れない。しかし、自己の体験をもとに弱者の気持ちを理解し、弱者が自立できるように支援することができるとも知れない。少なくとも、体面の問題でないことは事実である。坂木先生の話は胸を打つものがありました。

☒ ・カリキュラム自体に創造性がないのではないかと。
 ・道徳的な面（日教組も責任がある）が後退してしまっている。↓大人社会をみればわかる。
 ・自己主張する教師は、無責任な言動が多い。

・学校の多様化が社会の多様化においつかず、ついていけない。 ・国民性に問題

・知育とかわいいながら、主要教科中心、他の国々から学ぶ態勢が必要。

・制服にみられるような画一化がされすぎている。

・勉強ができないとだめな奴という傾向が強すぎる。

・もうけすぎ (money にきたない社会) 良い会であった。

☒ 途中から入ったので永田先生の話が聞けませんでした。他のパネリスト達、特に坂木先生の内容は、わが息子の感じと似ており“心理”が今更手にとるようにわかりました。もし息子にその時私たちが知識があり、ゆらいでいなければ、もっと辛い目に合わさずに済んだのではと後悔しています。中三で今は全く家族と口を効かず、私は一食だけ台所に置いて休んで、朝食べた跡をみて、生きてると思っています。これから校長に会わなければなりません。どなられ、すかさず、大泣きして、今は怒りでいっぱいですが、とにかく息子を学校から一応解放したいと思っています。

☒ 実際に不登校をした方の話を直接聞く事が出来て感激です。我が子(中一)の様子とオーバーラップするところがたくさんあり、うなづきました。子供の気持ちをわかってあげられる。それを訴えることも出来ない弱い子の気持ちをわかってくれる教師が増えることを願っています。坂木先生、頑張ってください。実際に悩みをかかえている親の会の、素直なお話がとても参考になりました。ありがとうございます。

☒ 坂木先生の体験談、子ども達の叫びとして聞かせて頂きました。子ども一人ひとりに寄り添って、とか、共感といった言葉をよく耳にしますが、それを見かけだけでなく、本当に実践している方は、私自身を含め、まだ少ないと思います、本日は大変勉強させて頂きました。「教師」という看板をぶら下げ、子どもだから…といった感じで、見下ろした態度がいつの間にか出てくるようになってきたと

思い恐ろしくなりました。

また「あさおの会」の方へ。率直なご意見を聞き、私も父母の方と共に歩いていければと思いましたが、このような現実のあることをしっかりと受け止め、謙虚さを持ち、考えていきたいと思いましたが。ありがとうございます。(川崎・教員)

☒ 坂木先生のような方が小学校の先生として勤務されていたことを知り、うれしく思いました。最近の先生は、エリートコースを歩まれた方が多く、心配していたところです。非学校化するためには、学校の先生もいろんなコースをたどった方、いろんな職業からトラバユした方が増えることを望んでいます。私も今、小学校教師という仕事をしています。教科書から離れた授業(教科書中心にならないという意味)子どもたちと一緒にできないものかと考えているところです。ですから、坂木先生のような方は、大歓迎(言葉が失礼になるかもしれませんが)です。

☒ 不登校の子をもつ親です。坂木先生の存在に感動しました。頑張ってください。

会場にはたくさん先生の先生がいるはずなのになかなか声が聞こえません。現場の教師の考えをもっと聞きたいと思いました。

☒ 坂木先生の話は、体験もまじえ、不登校の子の気持ち少しわかったような気がしました。私も小学校の教師をしています。今大切なことは“生きる力”を教えなければならぬということ。

そして、弱い者、いろんな人格を認め合うクラスづくりをしなくてはいけないということ、一層強く感じました。

☒ みなさんのお話、それぞれ感動しました。特に、坂木先生の話は良かったと思います。我が子が、小学校の時にこのような先生に接していたら、もっと違う今があったのではと思っています。今中二の男の子です。坂木先生のような方が沢山学校に生まれてくると良いのではないのでしょうか。

☒ 坂木先生の呼びかけは、先生になって良かったんじゃない。自分が経験しているから子供の気持ちも理解できるし、また年令に応じた心理状態がわかり、私の息子の心理や気持ちになるほどわかるようになりました。校長さんの言うことは聞き流してください。

いろいろな考えや人間がいるんだということが私もわかりました。とても勉強になり来てよかったと思います。

☒ 坂木先生の最後の言葉に同感です。いろいろな人がいること、それをプラスに考えていくこと、そしてそれを将来（就職などということだけでなく、生き方として）つなげていく場に「学校」がなっていくといいですね。（中学校教諭・三十才・男）

☒ はじめて参加させていただき、とても参考になりました。ありがとうございました。坂木先生頑張ってください。帰ったら、子供に話します。不登校の母より。

☒ 我が子が、私立中学校を受験し、合格して喜んだのも束の間、二ヵ月程で不登校になりました。公立中に転校してしばらくは登校していましたが、また行かなくなりました。いろいろな本を読み、Drにも三件程かかりましたがどうしても自分の納得する考えに会えませんでした。今日の武田先生の話、そして坂木さんの経験談は、大変参考になりました。

親の会の考えは、少し固まりすぎではないかと思えます。

大変勉強になりました。

☒ 後藤さんのお話が大変良かった。

話がすすむにつれて、不登校を「サセツ」ととらえている場面があったりするの、困るなーと思う。

いろいろな人の話が聞けてとても良かった。いろいろな子が受け入れられるよう、学校と自分自身

の心を風通しよくしたいと思う。次の機会にも参加したい。パネリストの人数を減らすか、一人一人のお話を少しみじかめにしていただいて、意見交換の時間が多いと良かった。休けいがないのはつらかった。学校から食事もとらずに来たので。でも、昼食ぬきでも来て本当に良かったです。坂木先生、疑いをもたずに、登校してくれる子には「来なくてもいいところ」という言い方ではなくて、来る子が楽しく過ごせるよう、心情的に子どもを受けとめられる先生になってほしい。先生がもつと大人になってほしい。不登校がどーのでなく。

☒ あさおの会の後藤さんのお話は、とても参考になった。進路の選択は、中学を卒業してしまえばさげられないものですが、その大事な時期に、親にとつては何を押さえて動いたらいいかわかりました。学校、学歴について、ふり払われないと次にいけないとおっしゃっていたことで、今不登校をしても、将来きちっとした仕事について、ちゃんと大学に行けるといふことよりも、社会のワクは一つはずし、自分自身の存在を確かなものにしていくことの大事さを感じました。

☒ シンポジストの皆様の話、それぞれに感銘を受けました。「学校」のとらえ方を構造的にとらえないと危険だということがよく分かりました。特に、武田さんの非学校化の努力が子どもの人権を守ることになると思っています。具体的には、どんなことができるのかが課題ですが、これから考えていきたいと思います。今日のような会を、各地で沢山催すことができると思います。

☒ とても良かった。武田先生のお話、山本哲士氏「ブルデューの言葉」が印象深かった。
 ☒ 具体的な話で、勉強になりました。

第五回教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐって Part3

—進路と自立を拓く—

1994年2月19日

発行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2-197
神奈川県教育会館内

☎ 045-241-3531

印刷：(有)神奈川教育企画

☎ 045-253-3435

KYOBUNKEN